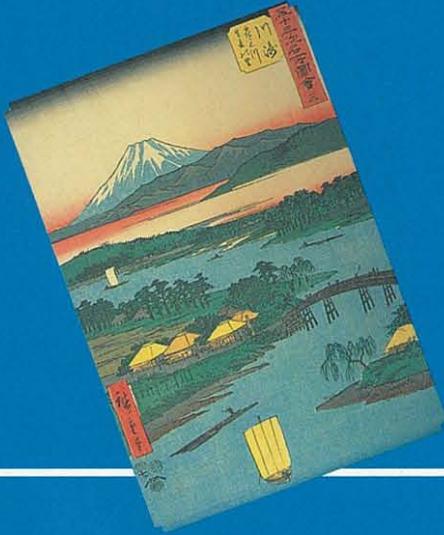


# 鶴見川



## 流

鶴見川にも生き物たちの賑わいを、まだまだ見ることができます。源流から河口付近まで、けなげに生きてるわたしたちの仲間を紹介しましょう。きっとこの川に、多様な色どりをみつけ今まで以上の親しみをおぼえていただけるはずです。

## 色



## 流

全長42.5km、源流の町田市上小山田から、京浜工業地帯の河口へと流れる一級河川の鶴見川。時の流れとともに、川も流域の姿も変わりつつあります。

生麦魚河岸通り  
(旧東海道)

鶴見川と、その周辺の識っておきたい情報を、しっかり網羅してお届けします。

## 識



## 流



川辺のイベントは、鶴見川ならではのアイデアがいっぱい。マイナスイメージがつきまとう鶴見川。でも参加すれば、今まで気づかなかった川との楽しいつきあい方を発見できるはずです。最後まで読み終えたとき、あなたはもう鶴見川ファンに。



## 式

流水が、がけなどから急に強い勢いで落ちる。滝。生きている水の激しい気性の一面を見せてくれる。



# 泉 (IZUMI)

自然に地中からわきでる水がたまっている場所。泉。森のなかにひっそりと、いつまでも佇んでほしい。



# みず (MIZU)

泉からわき、川を流れ海にたたらえられたり、雨となったりする水。命あるものに必要不可欠な、透明な液体。

# WATER

# 鶴

見川、多摩丘陵を刻み  
ベイブリッジまで、  
42.5 km。

あざやかな水系を忘れかけていないか。



昔の末吉橋の図

# 橋 (HASHI)

# HASHI

人の笑顔が行き交うルート。向こう岸とこちら側のコミュニケーションを発展させてくれる、橋。



# せき (SEKI)

# 堰 (WEIR)

水流を調節するために、河水や水路中に設けられたしきり。生き物にとっては、上流、下流への行止りでもある。

# 土堤 (TUZUMI)

水があふれないように、岸に土や石を盛り上げたもの。土手。昔から堤には水害からくらしを守るために、人の知恵が結集されてきた。

# Tu Tumi

# 土堤

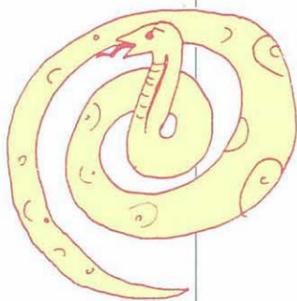




BELIEVE in NATURE つるみ川



# 川を知るには、遊ぶのが一番です。



【川の中を歩く】  
川で遊ぶ楽しみは、なんとといっても水に触れること。素足になって川の中に入ってみると、夏でもひんやりとした水の感触がうれしいものです。足の裏には川底の砂のつぶつぶ、大小の石の形がそのまま伝わってきます。

### 【川で泳ぐ】

川で泳ぎ、潜るといことは、頭のとびから足先まで水に接触することです。川の中を歩くことよりもっと川や水を知ることが出来ます。川はプールとも海水浴場とも異なる世界。そこには絶えず下流へ向かう流れがあり、底も変化に富んでいます。

す。プールには備わっていない生き物のすみかとしての場でもあります。川で泳ぐことは、自然の仕組みを体で覚えていくことでもあるのです。

### 【ボート、いかだやカヌーなどで川に浮かび、流れ下る】

ボート、いかだ、カヌー、浮き輪、エアーマットなど、水に浮かび安定しているものであればなんでもOK。それに乗って川に浮かび、流れに身をまかせて下つてみましょう。陸からながめるのとは、ひと味ちがう川の魅力を発見することが出来ます。いかだの作り方は、以外とカンタンです。必ずしも木で作る必要はなく、デコレーションに凝つたり、変わった素材を使うことができるのも、いかだ作りの楽しみ。ただし、上手に作らないと、せうかくのいかだが浮かべてすぐに分解してしまふことがあるので注意を。鶴見川で開催されるいかだフェスティバルには、参加者の創意にあふれた手作りいかだが登場しています。

### 【笹舟を流す】

木の葉や草の葉を川に流すと、川の中の水の動きがよくわかります。笹の葉で舟を作つて流してみましよう。石や浅い場所があれば、水はじやま

## ① 水きり

思い出に残るごどもの遊び  
文：屋間松之助

市民グラフNo.65より



水きりとは、小石を池などの水面すれすれに投げて、ピンポン玉とくつか弾みながら飛んでいかせることである。昔は、どこでもじやり道のため、石はいくらでもあった。でも、たくさん水きりをさせるにはできるだけ平らで、大ききも親指と人さし指でもてるくらいのものがよかった。小石の投げかたは、姿勢を低くして水面すれすれに、しかも石が回転しながら飛ぶように横投げをする。すると、ピンポン玉のように面白くいくつも水をきって飛んでいった。



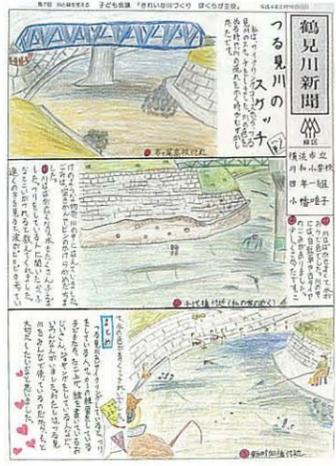
で要注意！水きりをうまくやるには、まずできるだけ平べたたい石を見つけること。人差し指で石の外周を持ち、親指と中指で石の上下をはさみます。姿勢をやや低くし、アンダーローで回転するように、思いきり投げます。そうすると石はいきなり水の中には潜らず、まるで水の表面で三段跳びでもするように飛んでいきます。

### 【動物や植物を見る】

川辺は鳥を見るには格好の場所です。鳥は季節、上中下流と、いた場所、環境の違いで生息する種類が異なります。夏鳥のオオヨシキリ、冬鳥

のカモ類、春秋の渡りの季節に二時、立寄るシギやチドリの旅鳥は、季節によつて移動します。けれどコサギやセグロセキレイなどは留鳥といわれ、地域によつて一年中見ることが出来ます。鳥を見分けられるようになるには、観察から始めると良いでしょう。パードウオッチングの集いはどの地域にもあるので、そこに参加して鳥の見分け方を経験者に指導してもらおうのも一つの方法。自分で図鑑を開いて鳥の種類を調べるのも楽しいものです。

マ等、川辺に生える植物も、季節や環境によつていろいろです。花を見るだけでなく、花と虫の関係など、植物をとりまく自然を大きく眺めてみましょう。川の中や川原には他にもいろいろな動物がいます。カ、エビ、カゲロウ、魚などを追いかけるのも水遊びの楽しみです。その他、風景を写生したり、川辺を親子や友だちと散歩する、夏のキャンプや夕暮れの花火など、川と親しみ、自然を楽しむ方法は、まだまだ沢山あります。あなただけの川での楽しみ、見つけませんか。



## 子どもたちからのメッセージ 「鶴見川新聞」

「鶴見川新聞」は、毎年「川と緑を考える子ども会議」にあわせて募集される、子どもたちの手づくりの新聞です。1992年には流域の63の小中学校から約1620点もの応募がありました。どの作品も現地に足を運んで発見したことや、調べたことなどを見事な文や絵で仕上げ

た力作ぞろい。子どもたちなりに、鶴見川への夢や、川の汚染への心配、思いやりを、かわいいイラストや手書きの文字で、紙面いっぱい埋め尽くしています。新聞づくりに参加することで鶴見川とのかかわりの認識が子どもたちの中に深められていくようです。鶴見川への愛着や思いやりを持ったこの子どもたちが大人になったときが楽しみではありませんか。

## ② ザリガニ

思い出に残るごどもの遊び  
文：屋間松之助

市民グラフNo.65より



ザリガニは、小川でも、池でも、田んぼでも水のあるところにはどこにでも住んでいます。ザリガニのはきはカニに似ており、姿はエビに似ているところから、エビカニとも、カニエビともよばれていました。ザリガニの道具は、竹ざおに木綿糸をつけ、鎌(おも)りは少し長めの小石でもよく、針はいらない。えさはスルメの足を五センチくらいにきつて、木綿糸の先にむすびつける。ザリガニはとても食いしん坊なので、すぐに食いついてくる。えさはなすまじと両方の大きなはさみで、しかりとつかみ、食いついているから、あわてずに糸をあげれば難なく捕まえることができました。

BELIEVE in NATURE つるみ川

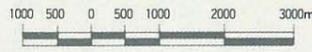


- ① 小山田緑地
- ② 野津田公園
- ③ 民権の森公園
- ④ 葉師池公園
- ⑤ 本町田遺跡公園
- ⑥ 七国山自然苑
- ⑦ こどもの国
- ⑧ 寺家ふるさと村
- ⑨ 都筑自然公園
- ⑩ 四季の森公園
- ⑪ 岸根公園
- ⑫ 大倉山公園
- ⑬ トリ池公園
- ⑭ 獅子ヶ谷市民の森
- ⑮ 小机城址市民の森
- ⑯ 三保市民の森
- ⑰ 熊野神社市民の森
- ⑱ 綱島市民の森
- ⑳ 夢見ヶ崎公園

流域の自然体感ゾーン

凡例

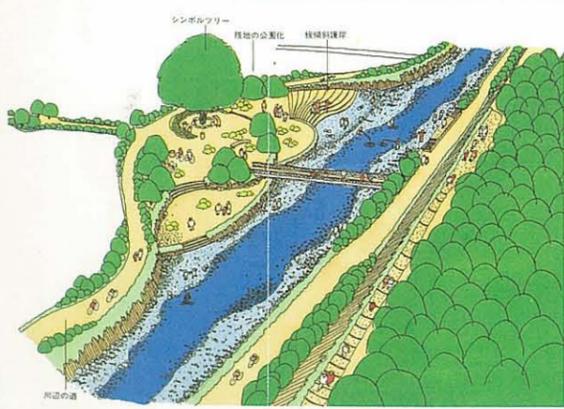
- 山林
- 田・畑
- 市街地
- 市役所・区役所
- 行政区境
- 川
- 駅(私鉄)
- 駅(JR)
- 国道
- 主な文化財



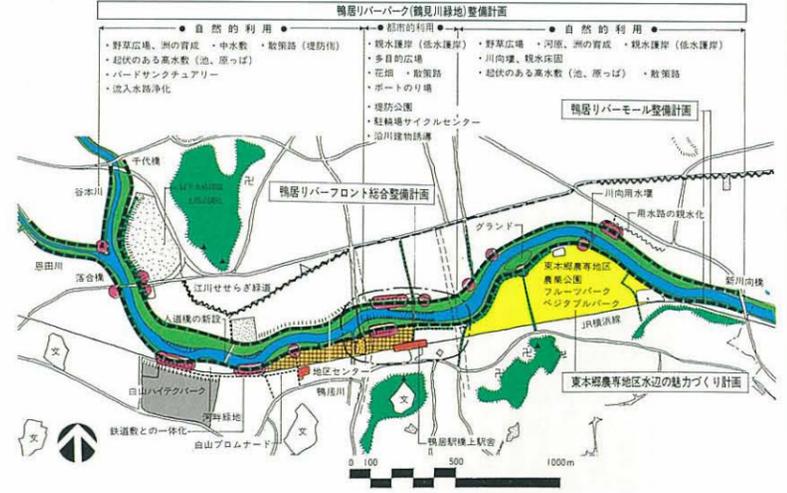
# 街と川が きれいなハーモニー を奏でる日。

LET'S THINK ABOUT TURUMI RIVER. 1992

### 川を座標軸としたまちづくりイメージ



### ●中流部(鶴見川)



性を再び取り戻すための街づくりや川づくりを本格的に考える時期を迎えているようです。

全長42.5kmの流域にさまざまな姿を持つ鶴見川。流域全体が一本の大きなつながりとして見ることができるときに、街と川のかかわりは、すべての場所でも無くなっているわけではないことが見えてくるでしょう。工場や住宅にびっしり囲まれた河口から中流部へ遡ると、河川沿いの低地には農地が広がり、伸びやかな空間が連続します。三保・新治の森にはたくさんの自然があり、そのなかでは生き物が自由にいらしています。そして町田市の源流域。ここにはムササビやキツネのいるよき森があり、アブラヤの棲む清冽な水の流れもあります。下流部からは想像が難しいほどの自然が広がっているのです。

水面に反射する朝夕の陽光や波の文様、波立つ流れやよどみ水面に浮かぶ水鳥、水辺の草花、釣り糸をたらしたり花摘みをする子どもたちの姿。それらが、文明の中で失ってはいけないものであることを、わたしたちに無言で語りかけてくるようです。川(自然)と人がむすびついた街は、システム化された都市の暮らしに、なにか欠けているものがあることを気づかせてくれます。

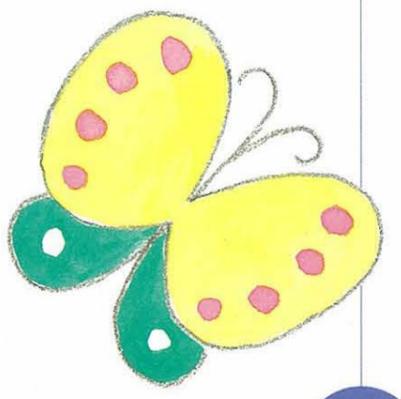
地球にやさしい型の開発プラン。自然と会話し続けられる都市計画など、少しずつですが、街づくりのなかにも価値基準の革命が起こりつつあります。川と街、川と人の暮らしの関係を、新しい形で再生する模索をはじめることが大事だといえるのではないのでしょうか。

都市の中にある川は、よどんだ色で流れ、悪臭を放つことや、ときには洪水を起こすこともあり。いつかの橋を渡るとき、あなたは川を見ることがあるでしょうか。暮らしのそば

に川が流れていても、もう気にも留めない方が大半でしょう。ですが、誰が川を汚くしたのか、という問題は大きく残ります。そして人と人がふれあい、釣り人や、夏には盆踊りで賑わっていた土手の風景は、なぜなくなってしまったのか。川を空っぽの風景にしてしまったのは、誰の責任なのか、という問題も。

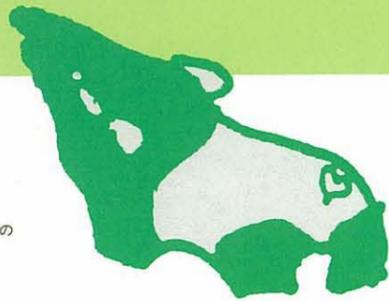
かつて川のある街は、川に向かって開かれていました。川もまた街に向かって開かれ、川と街が相互に関係しながら、温かな地域社会を形成していたのです。

今日の都市というのは、街が川に向かって開かれていません。都市生活者のくらしのなか、川と交わる機会はずっと少ないでしょう。川もまた、洪水処理装置としての期待に応える機能を身につけ、さらによきよきしい形で存在しています。本来、川は生活のなか自然に溶け込んでいたのです。わたしたちは、川との関係



三

鶴見川流域図を動物のバクに見たてて描いた岸由二さん考案のシンボル・マーク。「バクは、僕たちの悪い夢を食べてくれて幸せな夢だけを残してくれるんです」と岸さんのT.R.ネットワークの活動への願いも込めてのアイデア。



- 座談会出席者  
プロフィール(発言順)
- 草野 重芳 鶴見川を楽しむ会世話人／主に鶴見川下流部を舞台に、鶴見川を楽しんじゃう多彩な活動を展開。鶴見川流域ネットワーク(TRネット)の実行委員会世話人。／勤務先は鶴見区にある千代田化工建設。
  - 岸 由二 鶴見川源流自然の会代表／鶴見川の源流の町田市北部丘陵で、森や泉や清流を守ろうと、ナチュラリストや地域住民と一緒に活発な運動を展開している。「鶴見川流域人」を名乗る。／慶応大学経済学部教授(生態学)
  - 北川 淑子 緑区・自然を守る会／緑区の三保・新治地区を中心に、谷戸に生える鳥や昆虫、植物の観察会などを地道につづけている。横浜の原風景ともいえる谷戸の自然に優しいまなざしを注ぐナチュラリスト。
  - 久保田正男 鶴見川子供発見団／わき水調べ、古家調べ、雑草調べ、街の昔調べなど、子供たちの目のつけどころはとてユニーク。鶴見川の源流から河口まで、とにかく足を運んで調べつくす。子供と共に川を歩いて15年。／横浜市立東台小学校教諭。

がなくなっていくのが見えて、「鶴見川源流自然の会」というのを始めたんです。それが鶴見川への恩返しのような気持ちもありますし、そうしないと自分のアイデンティティがどっからちやうやうなところあるんです。

北川：ずっと浜つ子で磯子に生れ育つたんですけど、やっぱり自然に遊んでました。大岡川の上流が遊び場で、ザリガニやホトケドジョウを獲ったりとか、谷戸ですから溜池もあつて、そこでギンヤンマを追っ掛けたり。でも、だんだんオリンピックとか高度成長の波が来て、今でいう洋光台とか久良岐ヶ丘とかあの辺りの谷戸が潰されて、ブルドーザーが動きまわっている状態がたんだですね。ヘイクボタルなんかがいなくなつたことをすごく残念に思つて、作文コンクールに出したりとか(笑)。だからそれでどうしたらいいのか分からないんですよ。大人は経済活動に組み込まれて忙しいし、そういう作文を書いてなんとかして欲しいと思つても、何にも戻つてはなかったんです。私も成長するにつれ、自然との間に距離ができていたんです。結婚して子供ができて、理屈じゃなくても自然と遊ばせたい、とひたすら思いました。川崎に移つてからは、近くの多摩川へ子どもを連れて日参してました。かなり河口の方で、あまりきれいな川じゃなかったんですけど、そこはまた子どもが遊ぶような所があったんです。そこに7年くらい住んでいました。終わりの2年くらいは整備が進み公園化してしまつて、私にとっては自由の天地ではないと

かなと思つたりするわけなんです。それと、孫子の代に川の楽しさを我々が伝えなくてはいけない、という思いもあつて。そんなことで、活動をやっているんですけど。

岸：僕は2歳のときに鶴見川の弁天橋という工業地帯のなかで暮らすようになって、それから延々37歳まで鶴見で暮らしてました。鶴見川橋のたもと池でモツゴを獲ったり、森永橋のあたりでカニを獲ったり、僕も鶴見川には本当に遊ばせてもらいました。鶴見川に行けばなにか楽しいことがある、幸せな時間がある、いつも感じていましたね。生きものはいっぱいいたし、ぶらぶらしていれば大人がやってくる、遊んでくれたし、すこく水辺は幸せだったなと感じます。それと僕は、川辺を移動して、大きくなつていったということがあります。昭和30年代当時、子どもたちにとつて安全な移動の場所というのは土手だらけなんです。たんだん探検して広がつていって、上は綱島、下は大黒町の河口まで行つたんです。そんな暮らしを中学のなかばまで続けていたんですけど、大人になると、少し鶴見川と距離ができていたんです。ところが結婚して、子供と昔の光景がなくなつた鶴見川へ遊びに行くようになって、ふと気付いたんですけど、自分の住んでいる地元の鶴見川の世話をしているのを忘れていたな、鶴見川の面影を見なくてはいけないな、と。そのあと鶴見川の源流の方へ引越したんです。でも、そこに幼いころに遊んだ末吉台地の谷戸の景色がそのままあつたんです。ただ、すごい開発の波で自然

久保田：僕は昭和20年に神奈川県の大黒橋で生まれました。滝の川が一番身近な川でした。当時その滝の川はすでにコンクリートで張られていましたね。戦後まもなくして、たからね、川の中で鉄くず拾いで、大人の方が降りていって、一生懸命やりました。それをすーっと眺めていてね。なんかいいものが取れるんじゃないかと思つて(笑)。で、僕と川のかわりは生物があまりいないような川で、なんか人の営みの方が興味があるというか、生きるために水をどうするか、そういうところの興味が強かつたんですね。

1978年に戸部小学校に赴任しました。そこで、子どもたちと川を歩いてみたんです。それがおもしろくて、川には人それぞれに思い入れがあるんです。そんなことをカタチにしてみよう、と「鶴見川子ども発見団」を作りました。

司会：どうも、やはり皆さん原体験というものが、今に及んでいるようですね(笑)。ところで、水系を中心にしたコミュニティづくりというものが、皆さんの活動などを通して注目されていますが。

岸：僕の幼いころは、川の存在が街のなかでも大きかつたんです。い

'92

対談 川と人と街  
鶴見川流域人の発明に向けて

自然と遊んで  
もらった、あの幸せな時を次の世代へ  
伝えよう。



横浜市のおよそ3分の1を占める鶴見川流域。河口から町田市上小山田の源流まで、その土地の表情に合せて印象を変えていく鶴見川。その流域に住む人々が鶴見川にもつ思いは様々です。91年に、流域の16の市民団体が手をつないで発足した鶴見川流域ネットワーク(以下、TRネット)。それぞれ別の活動をしてきた団体が一致団結して、鶴見川への思いをイベントに託して活動をしてきました。今回は、その団体の中から、4名の方に出席していただき、鶴見川への思いを熱く語り合いました。

司会：市民団体が集まって発足した鶴見川流域ネットワークの活動は、高い評価を得ていますけれども、皆さんはもろもろ本業があまりありません。まず最初に伺いたいのは、その忙しい日常のなかで、さらにまた活動に情熱を傾けられるというのは、川を含めた自然を愛してらっしゃるからだと思つていいですか、その原動力の源というのはいまだに川への原体験なんですか。

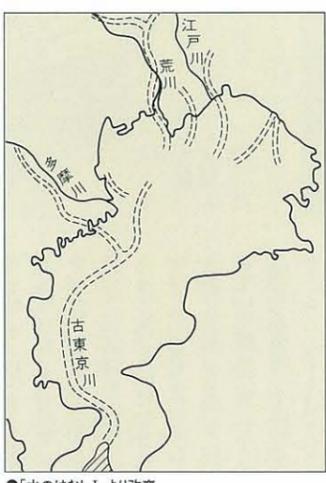
草野：私は九州の佐賀出身で、そこに流れる有田川でたくさん遊ばせてもらったんです。もう、夏休みは朝から晩まで遊んでました。泳いだり、釣ったり。カブトガニの生息地で、まあ、そのころは「ハチガメ」って呼んでましたけど。潮が引いたところに泳いでいると、足にひっかかるんです。あ、また、いたいたつていうふうにもぐつて、しっぽ捕まえてひっぱり上げるんですよ。そんなふうには本当に楽しんでます。川で遊んでいて思い出がいろいろあつて、それで都市の河川を見ますと、これはなんとか元へ戻せないもの

なと思つたりするわけなんです。それと、孫子の代に川の楽しさを我々が伝えなくてはいけない、という思いもあつて。そんなことで、活動をやっているんですけど。

岸：僕は2歳のときに鶴見川の弁天橋という工業地帯のなかで暮らすようになって、それから延々37歳まで鶴見で暮らしてました。鶴見川橋のたもと池でモツゴを獲ったり、森永橋のあたりでカニを獲ったり、僕も鶴見川には本当に遊ばせてもらいました。鶴見川に行けばなにか楽しいことがある、幸せな時間がある、いつも感じていましたね。生きものはいっぱいいたし、ぶらぶらしていれば大人がやってくる、遊んでくれたし、すこく水辺は幸せだったなと感じます。それと僕は、川辺を移動して、大きくなつていったということがあります。昭和30年代当時、子どもたちにとつて安全な移動の場所というのは土手だらけなんです。たんだん探検して広がつていって、上は綱島、下は大黒町の河口まで行つたんです。そんな暮らしを中学のなかばまで続けていたんですけど、大人になると、少し鶴見川と距離ができていたんです。ところが結婚して、子供と昔の光景がなくなつた鶴見川へ遊びに行くようになって、ふと気付いたんですけど、自分の住んでいる地元の鶴見川の世話をしているのを忘れていたな、鶴見川の面影を見なくてはいけないな、と。そのあと鶴見川の源流の方へ引越したんです。でも、そこに幼いころに遊んだ末吉台地の谷戸の景色がそのままあつたんです。ただ、すごい開発の波で自然

人類の誕生

地球上に人類が登場したのは約40万年前(新生代第三紀の終わり)。そしてその後現代に至る新生代第四紀は、人類の時代といわれるように、人が猿人に次いで原人、旧人、新人の順に進化を遂げてきた時代です。およそ20万年前に始まったといわれるこの第四紀は、洪積世、沖積世と二分され、洪積世には4回にわたつて地球上が広く氷河におおわれた時期(氷期)がありました。今からおよそ2万年前ころは氷河が最大に発達した最も寒い時期で、当時の気温は現在より7〜8度低かつたと考えられています。このような寒冷期には、海から蒸発した



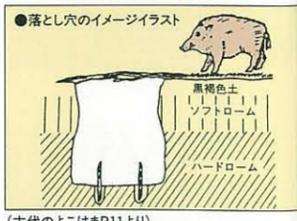
●水のはなし1より改変

先土器時代から縄文時代へ

今から1万2千年〜1万年ほど前になると、長い氷河時代が終わって温暖な気候が訪れ、日本列島では土器と弓矢を持つ食料採取段階の時代、すなわち縄文時代が幕を開けました。とはいえ、先土器時代から縄文時代へ移るには長い転換期があり、この間に日本列島最古の土器といわれる陸線文土器がつくられました。陸線文土器は細い粘土ひもをめぐらしたもので、縄目文様はなく、丸底といった特徴を持っていて、小笠原区川崎の花見山遺跡からは、小さな竪穴住居、石器作りの台石とともに、多数

より糸の文様を付けた土器

縄文時代早期の初頭には、撚糸文土器(一本の細い棒ひもを巻き付け、土器面を回転させて撚糸の文様を付けた土器が使われるようになり)が現れました。また、縄文時代早期の終わり頃(約7千年前)のものとして、狩猟のための落とし穴と罠の遺跡が発見され、当時の人々は一定の地域内で移動性をもった生活をしていました。



弥生時代

紀元前2〜3世紀ころから始まる弥生時代を特徴づけるものには水田耕作です。稲を栽培するにはそれに適した土地を耕し、その周辺に居住する必要があるため、人々は定住生活を始めるようになり、弥生人の住居は、耕作に適した湿地を見下ろす台地上に設けられることが多く、港北区中川町にある大塚遺跡は、鶴見川の支川早瀬川を見下ろす標高50mほどの平坦な台地上にあります。竪穴住居跡90戸

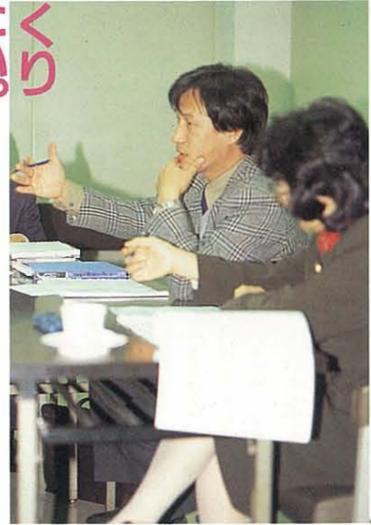
など、それらを取り囲む環濠(かき)なる弥生時代中期の拠点集落跡で、そこには当時100人以上の人々が住み、早瀬川の川筋や付近(谷田)などで本格的な稲作を行っていたものと考えられています。この環濠集落の南東に接して、歳勝土遺跡とよばれる25基の墓地も発見されています。これらの遺跡は昭和61年に大塚・歳勝土遺跡として国指定史跡となりました。現在は埋め戻され、原っぱのようになっています。将来、港北ニュータウン地域からの出土品をはじめ、横浜にかかわりの歴史資料の保存・公開をする横浜歴史博物館が建設される予定で、大塚・歳勝土遺跡は、この博物館の野外施設として位置づけられ、歴史公園として整備されるということです。



●大塚遺跡 (古代のよこはまP20より)

対談 川と人と街と 鶴見川流域人の発明に向けて

いろんな生き物の賑わいがあった。人の賑わいがあった。お祭りといえ、屋形船も出ていた。土手に行けば人がたくさんいて、わいわい釣りをやっていた。橋ひとつと釣りに釣りに道具屋さんというものがあつて、手ぶらで行っても釣りができたんです。秋になれば町工場の親父さんとか職

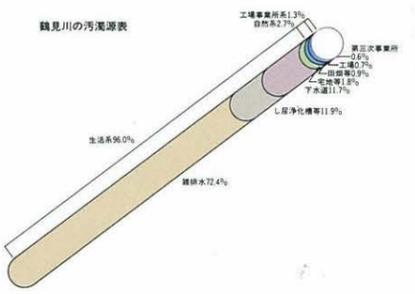
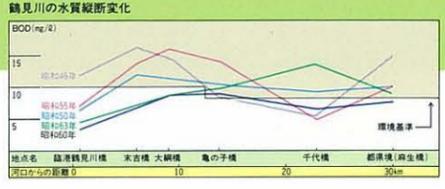
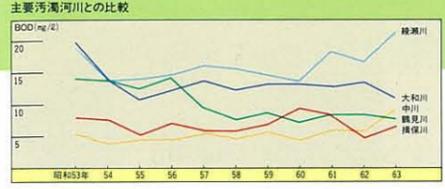


工さんとかみんな釣りに出て。釣った魚を家に持って帰れば、天ぷらやから揚げになったわけ。僕の幼いころの鶴見川というのは、人が人と交流する、しかし同時に人が自然とも交流する広場になっていたんです。それがいつの間にかすーっとなくなりました。

水系単位の街づくり、コミュニティづくりをを考えていきたい。

草野：今の日本というのは地元の方がからっぽになってしまつて、会社にコミュニティもおんぶしているところがありません。だから、もう一度コミュニティというものをちゃんと考え直す必要がありま

ういぶん楽しみの世界を再組織するとか、街づくりを考えたりということが必要ではないでしょうか。北川：私たちの会を始めたときに、自然保護だけを言っている共感を



はまだらに新治のようなくとも残つていれば、源流にはムササビやキツネもいたりする、非常に面白い川ですね。この235kmの市街化、という基本はまあ認めた上で、残っている自然はうんと大切に、ある意味で川におすがりしてね、もう一回地球とちゃんとつながつたような街づくりを、首都圏のど真中でやれる可能性があるたいへんな川だと思いますよ。

北川：今は100haくらいのまとまった新治地区の自然を残そうと活動しています。全部残すのは無理らしいと。谷戸というのは、新治にしても赤田にしても、全部、鶴見川にそそぐ源流域なわけ。水源の森を壊してしまつたら、今でも汚い鶴見川が、本当に家庭の雑排水だけを流す巨大な排水路に化してしま

つの子どもたちもかわつてくる。子どもの見た川の姿を映して、それが色付けされないカタチでうまく行政に活用してもらえればいいな。僕の活動も結局は街づくりにつながるんです。岸：僕は、行政区画でもう一度地域の作り直しをするというのは限界があると思います。行政区画をつなげていくのも地球にはならないけど、川がつくる水系をくつければ日本列島になつたりするわけですよ。日本列島はむしろ水系で分類すると余るところが、ほとんどない。で、水系を単位にして、もう1回人と自然のネットワークを作りなおす。そこで水系単位で出来上がつてくる文化のなかに行政は副次的な形で参加して行く。そういう形で地域を見直して、街づくりをやるのが、今の時代に地域をもう一回考え直すということになるんじゃないでしょうか。

草野：北川さんがおっしゃるように、川が死んでいてはお話にならないです。水系にはみんなそれぞれの歴史や文化があるわけだから、コミュニティづくりには絶対の場ともいえるんです。それと、やっぱり身近にある都市河川の代表的な川として、鶴見川が再生できれば他の川だって、という感じがあつて、一つのモデル的な川になるんじゃないですか。岸：横浜市のなかで鶴見川の流域ついでには33%を占めるわけですが、どこが流域の町田市は全7割が鶴見川水系なんです。だから町田にとつて横浜よりも鶴見川というのはいかに川なんだから、町田市の人には鶴見川がほとんど見えてなくて、玉川学園に住んでいる人とか、駅周辺の人は、自分の住んでいる地域を多摩川流域だと思つていて、多いんです。最源流がピカピカと、横浜の人たちにはよく見えている鶴見川が、町田の人たちにはよく見えていない。だから、僕が活動で何を一番はじめにしたかという、源流域に町田市の人や東京都の人を連れて行つたんです。鶴見川の一番上には、まだこんな



に、つかい泉があつて、ハヤがこんなにいます。久保田：この辺り(横浜)の人たちにとつてはね、川を渡るついでに、多摩川を渡るついでに、なんじゃないですか。岸：面白いテストがありましたね。自分の家で飲んでる水はどの川から来るか、流す排水はどの川へ流れるかを聞くんですよ。は、びっくりしている人は、本当に少ない。たいていは横浜市の北に、何十人かに聞いてみると、自分の家から出た水は多摩川に行くと思つている人が案外いるし、その源流は相模川に行つていると思つている人もいます。町田市で聞くと、何川に入つているか知らない人が、いっぱいいます。鶴見川ついでに言葉自体が知られていない。水は汚くないで流しちゃうという一般論と、あ、家で流した水はあそこ、鶴見川に入つて、あそここの下の堰のところにはハヤが見えていて、ということを知つて流すのは違うんですよ。久保田：「子ども会議」でね、アンケートをとるんですよ。一番最初に、あなたにとつて一番身近な川、自然の名前をあげてくださいというのね。鶴見川とか名乗るんですよ。それを印象づけようという意図での質問なんです。岸：流域の人が自然に鶴見川に魅かれていて、それぞれの心のなかにインディアンマップを持つことが大切だと思つて、た、川沿いの施設にね、七福神じゃないけど、名所をいっぱい作つて、巡礼ができるようなルートがある、と。ここから何

鶴見川流域の歴史 HISTORY

なぜか鶴見川流域に多い

杉山神社

横浜市内に36(合併社をいれると40)、町田市内に5、川崎市内に3(同4)、稲城市内に1の計45(同50)の杉山神社があります。このうち半数以上の29(同35)が鶴見川の流域に集中しています。なお、多摩川を越えた北側には全く分布していません。杉山神社は、いつ頃、誰が、何のために祀つたのかも明らかではありません。ある氏族がその地域に入植定着し、鶴見川流域の各地に分かれた際、一族の氏神を祀つた神社を勧請したものであるという考え方、あるいはこの地域にもともと存在した農耕集団の氏神が、有力土豪の統一により杉山神社となったという考え方があり、また、延長5年(927)に撰進された「延喜式」巻9の神名帳には、武蔵国44座の1座として、「都筑郡1座 小杉山神社」と記載されており、現在横浜川崎市となっている旧南武蔵3郡(都筑・橋本・久良岐)においては唯一の延喜式内社です。過去の研究でこれこそ式内社であるとされた神社が複数存在する場合、それを論社といいますが、杉山神社でこれにあたるのが6社あります。これら論社はそのほとんどが鶴見川流域の沖積地をのぞむ小高い丘の上に鎮座しており、近辺に弥生時代から平安時代に至る生活の跡を伴うことが多くあります。このため稲作農業に従事してきた集団によって、当社の原型が作られたことを示していると考えられています。そして、鶴見川の水害の防止と豊作を祈念して官社に列せられたのでしよう。



古墳時代の始まり

横浜に高い墳丘をもつ古墳が出現したのは、およそ4世紀後半ごろのことです。鶴見川流域には2基の規模の大きな前方後円墳が築かれました。1基は多摩川の下流低地を一望する港北区日吉の台地東端に築かれた全長72mの観音松古墳で、もう1基は矢上川をへだててそれと相対する川崎市幸区北加瀬の台地西端の小丘に築かれた全長87mの加瀬白山古墳です。この2基の古墳は鶴見川流域の他の古墳との規模や副葬品に大きな格差があるため、被



葬者は、流域の他の古墳の被葬者より広域を支配した地方首長であったと考えられます。白山古墳の木炭層から出土した三角縁神獣鏡は、京都府椿井大塚古墳・山口県竹島古墳から出土した鏡と同じ鏡型でつくられたもので、このことは畿内の王権との関係があつたことを示しています。

鶴見川流域に残る古墳

稲荷前古墳群



稲荷前古墳群は、緑区大塚町にある古墳群で、前方後円墳2基、前方後方墳1基、方墳2基、円墳5基で構成されています。これらの古墳は、4世紀〜7世紀にかけて築造されたものです。4世紀〜5世紀頃の谷本川流域を中心とする地域は、首長によって統合されてきたようであり、畿内の王権とも一定の政治的文化的な関係を持つようになっていました。全10基の古墳のうち、前方後円墳と前方後方墳の3基は、この地域の歴代首長の墓で、それ以外はその一族あるいは子孫の墓であると考えられています。1970年に県指定史跡となり、現在は2基が保存されています。

市ヶ尾横穴古墳群



6世紀の終わりころには、崖や斜面に掘つた横穴の奥に遺体を安置する横穴墓がつかれるようになり、鶴見川流域でも緑区市ヶ尾などで、7世紀まで数多くつくり続けられました。市ヶ尾横穴古墳群は、全19基からなりつていて、この市ヶ尾横穴古墳群では、前庭部と呼ばれる横穴入口にちかい広場の部分から、刀・土器類などが発見され、ここで死者をいたみ、祖先の霊を祭る儀式が行われていたのではないかと考えられます。1957年に県指定史跡となり、現在12基が保存整備されて見学しやすくなっています。

鶴見川流域人の発明は、未来への素敵な贈りもの。

キヨはクルマに襲われずに安心して歩いて行きます。と。そこに行けばお茶を飲むくらいに休憩所がありま...

北川：神社とかお寺っていうのは、人と水系を結びつける格好の場所でしたからね。



し概念を広くしてもらわないとね。久保田：子どもたちはある程度、地域にしがらみを持っていて、鳥山川人だとかね(笑)...

草野：縁結びみたいな発想がすごくいいんですよ。会社からちょっとはみだたところだね...

久保田：鶴見川マラソンなんていうのもいいじゃないですか。全長4.2キロでちょうどいいし...

20、30代の人で、抽象的に物事を考えて世界を飛躍していきたい、という思いの人たちが鶴見川流域人という概念をおもしろがってくれて...

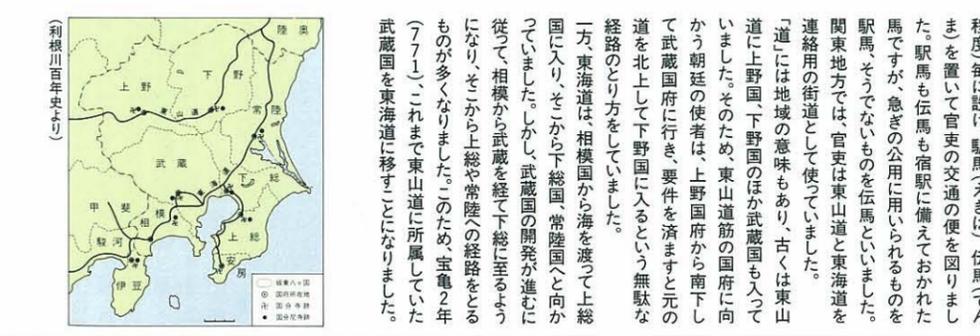
作って、その集団を通して自然とつきあう、というのではぜんぜん満たされなくて、必要がなかったら集団...

岸：僕が幸せに生きていくためには、いつも鶴見川に魚がいたりね、雑木林に蝶がいたりという第一な...

本人の情緒を育んできた風景として必要ではないかと思えますね。川幅が1メートルもないようなところまで、コンクリートで固めてますけど...

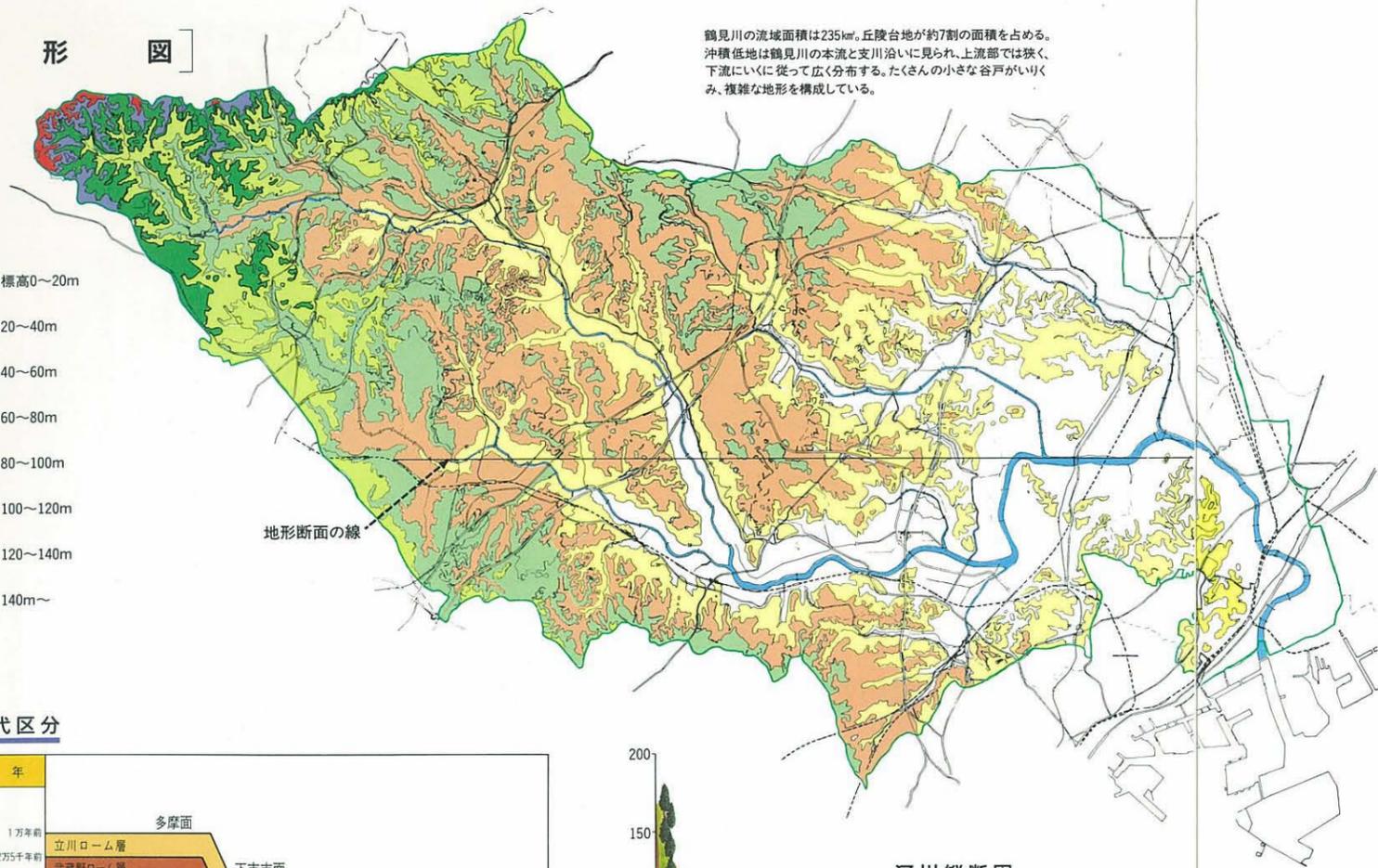
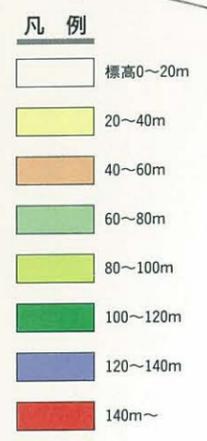


飛鳥・奈良時代の道路 大化の改新に始まる律令国家は、中央集権的支配体制が特色であり、その支配体制を支えるためには、中央と地方との連絡をよくする必要があります...



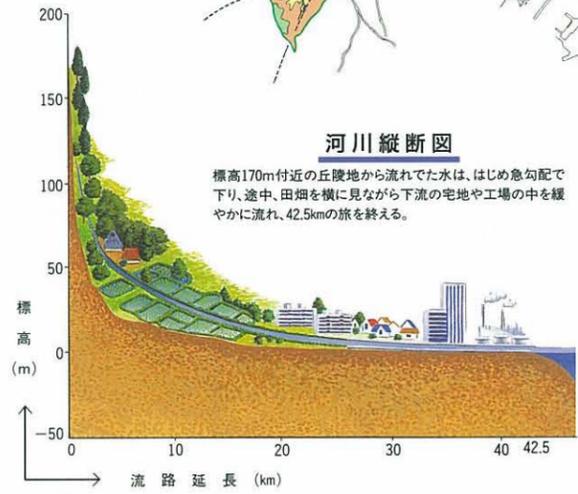
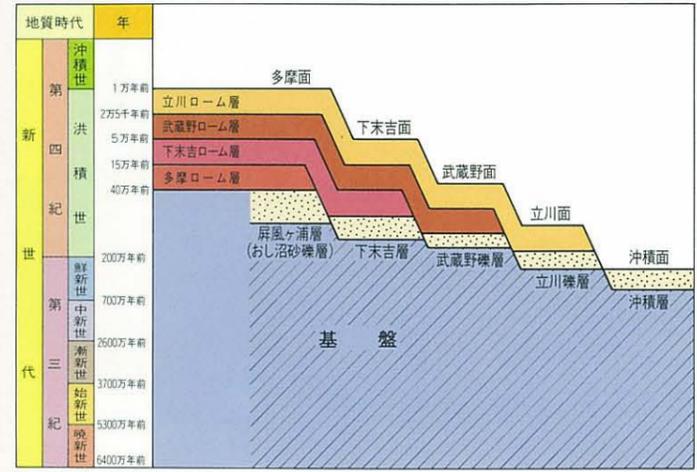
源頼朝は、鎌倉に入ると、新しい道づくりに着手しました。こうしてできた道、諸國の御家人が、いざ鎌倉と駆けつける道...

# 地形図



鶴見川の流域面積は235km<sup>2</sup>、丘陵台地が約7割の面積を占める。沖積低地は鶴見川の本流と支川沿いに見られ、上流部では狭く、下流にいくに従って広く分布する。たくさんの小さな谷戸がいくつみ、複雑な地形を構成している。

## 地質時代区分



# 地質や地形の特性が、この川特有の水害の起きやすい性格に。

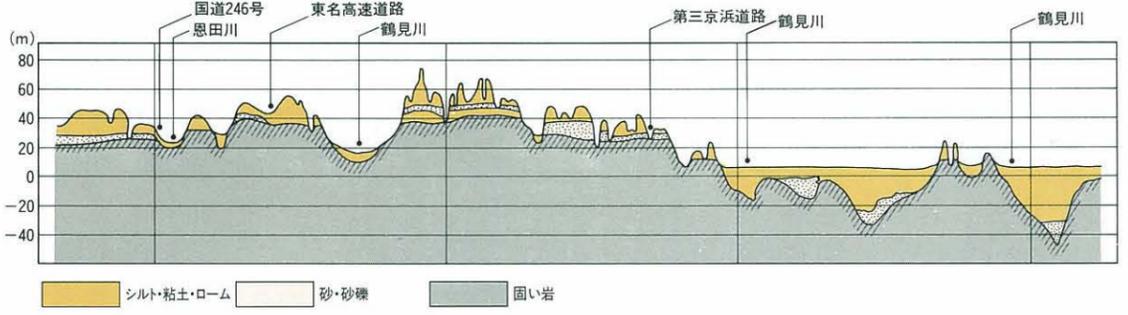
鶴見川流域は、大部分が丘陵・台地・沖積地から成り、流域の約70%が丘陵・台地、残りが沖積地(ちゅうせきち)となっています。地形をみると比較的平坦で、標高100m以上の地形の分布範囲が狭く、それ以下が大部分を占めています。この鶴見川流域の地形はどのようにつくられてきたのでしょうか。

「表土の大半は箱根の火山灰」  
鶴見川流域では、中新世後半から鮮新世を経て第四紀前半までの約50万年にわたって土砂が堆積し、三浦層群(砂岩または泥岩で構成される)が陸化しました。その後、氷期と間氷期が繰り返され、丘陵の一部は侵食されて浅海となり、この海底におし沼砂礫層という約10mの層をつくりました。やがて最後の氷期による海退が始まり、陸化した層の上に、当時盛んに噴火を繰り返していた箱根火山の火山灰が数mから数十メートルも堆積しました。現在鶴見川流域の表面を覆う赤土は、一部富士山を含みますが、ほとんどは箱根火山の活動による火山灰です。この火山灰層はローム層と呼ばれます。

「6千年前には小机も海の中」  
1万5千年前から次第に海面が上昇し、6千年前ごろにかけて海面の上昇が甚だしく、台地の奥深くまで海が入り込んでいました。これは縄文海進と呼ばれ、鶴見川流域でも現在の5~10mの等高線のあたりまで海が進入し、小机や勝田付近まで海でした。縄文時代も後半になると海が退いて現在とほぼ同じ位置になりましたが、これまで海が入り込んでいたところは、川によって流されてきた土砂が堆積し、ゆるやかな勾配の沖積平野をつくりました。

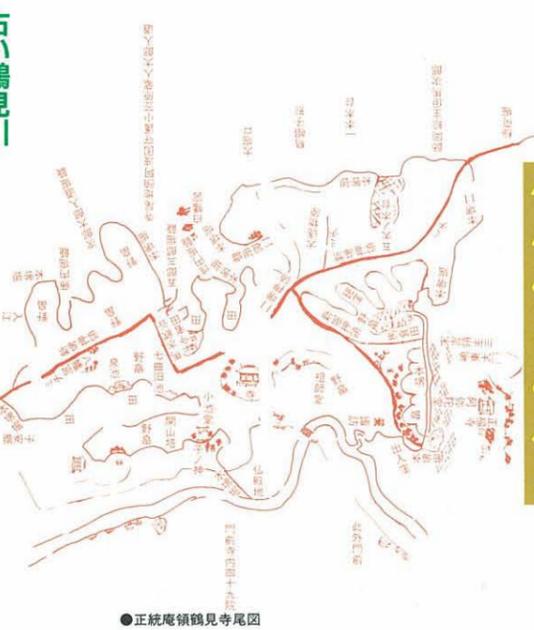
「下流は勾配が緩く、大きく蛇行」  
鶴見川本川と支川の恩田川が合流するところは42.5kmのほぼ真中で、ここから上流は多摩丘陵と呼ばれる丘陵を横切るように流れています。多摩丘陵を流れているあいだ、鶴見川は急勾配で、大きく曲がりくねった様子はありません。しかし、下流の河床の勾配はきわめてゆるやかになっていきます。このため、川はくねくねと曲がりくねってしまいました。このような地形の特性によって鶴見川の下流では水害が起きやすくなったのです。

## 地形断面図



## 古い鶴見川

### 流域の図



「正統庵領鶴見寺尾図は、かつて鶴見川の松蔭寺に伝わっていた絵図で、建武元年(一二三四)現在の鶴見区周辺の様子(二三四)現在の鶴見区周辺の様子」

## 室町時代に作られた城



鶴見川中下流付近には、寺尾(馬場)・獅子ヶ谷(以上鶴見区)・小机・茅ヶ崎・山田・矢上(以上港北区)・荏田・佐江戸(榎下)・恩田(以上緑区)などの諸城が築かれていたといわれています。

この内、文明10年(一四七八)の太田道灌の小机攻めで名高い小机城や茅ヶ崎・荏田・榎下の城跡は今日でも比較的保存がよく、いずれも本支川南岸の舌状台地上に築かれています。

後北条氏の時代、鶴見川流域では、小机城が後北条氏関東制覇の一拠点として位置づけられ、北条氏秀が城主、その下で笠原為信が城代を勤め、「小机衆」と呼ばれる在地主豪いゆる国士衆(くにしゆう)としてゆるを押しえていました。小机衆といわれる

一団は、谷戸を中心とした一帯の集落構成員で形成された在地主豪武士団で、鶴見川流域を共同体的な組織で支配し、その支配地や権利の確保のために動くもので、特定の主人に忠誠を誓うというような集団ではありませんでした。

## 江戸時代の始まり

天正18年(一五九〇)七月、後北条氏が豊臣秀吉によって滅ぼされ、百年にわたる後北条氏の関東支配は終わり、代わって徳川家康が関東を支配する事になりました。

家康は新たな領地となった関東の経営にただに取り掛かりますが、その前に知行割を行って、家臣達に新しい知行地を与えなければなりません。この知行割の原則は次のとおりでした。

- ①江戸城に近い地域には直轄支配地を置いて、年貢米の確保に有利なようにする。
- ②下級の家臣には、なるべく江戸に近い、夜泊まりの距離の村の知行地を与え、ここに

陣屋を置いて妻子を住ませ、単身で江戸に勤務させる。

- ③江戸から少し離れた後北条氏の支城の跡に、1万石クラスの上級家臣や徳川一門の松平氏を配置する。

鶴見川流域は、江戸に比較的近い関係上、おおむね徳川氏の蔵入地(直轄領)か中下級の家臣達の知行地となりましたが、その後横浜地域では、幕府直轄領から旗本領になった地域が多く、都筑郡の大半は旗本領となりました。

## 用水の確保の苦労

徳川氏の関東入国により、後北条氏の時代に活躍した連臣(れんしん)のなかには、徳川氏に仕官して新たな旗本になった者と、村に土着して農民となった者がいました。このうち徳川氏に仕官したのは上層の家臣だった者が多く、帰農したのは小机衆などの在地主豪(国入衆)が主で、彼らの多くは村の指導者となって農業経営に従事するようになったり、農耕に従事するようになったり後北条氏の遺臣達は、江戸時代の初期には村の名主や代官の下役に任用されて村内に威勢をばってました。

江戸時代から中期にかけて、関東では利根川中流、荒川下流の湿地帯を中心に広汎に治水事業が行われました。しかし、鶴見川流域では下流域でいくらか荒地を新田にする努力が行われましたが、広い面積の新田開発は行われませんでした。用水対策としては、溜池が作られましたが、市内の溜池は比較的小さく、水量が少ないため干上がりやすいものでした。鶴見区獅子ヶ谷の二ツ池は、獅子ヶ谷村が寛永年間(一六四一~一六四四)に完成した溜池で、これによって村高が約50石増加しました。当初ひとつであった溜池は、元禄年間(一六八八~一七〇四)に東西に仕切られて二ツ池となり、東側の池は駒岡村の用水に使われるようになりました。



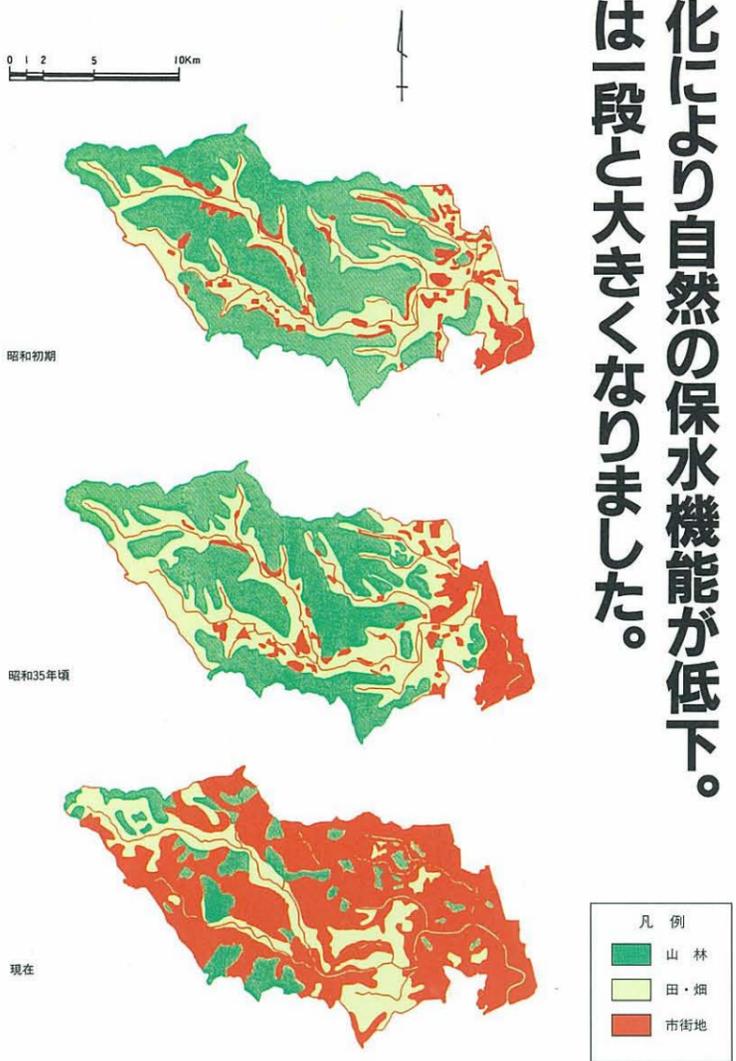
## 鶴見川流域の歴史

[鶴見川の特性]—[土地利用による変化]

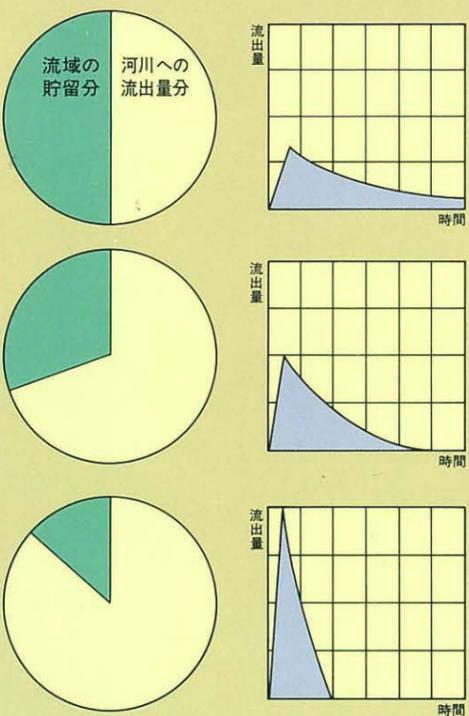
「急速に進んだ都市化」  
 流域内の森林や畑などには、降った雨を地中へ浸透させる機能(保水機能)があります。また、川沿いの低地にある水田や畑には、雨水を一時的に貯留する機能(遊水機能)があります。この自然の機能が降った雨の一部を流域内に貯留し、徐々に川に流すことにより、下流部の水害を軽くしていました。戦前まで鶴見川流域は河口付近を除き、大部分が森林や水田、畑として利用されていましたが、昭和30年代後半からの高度経済成長に伴い、東京を中心とした首都圏には、急激な人口流入現象がおこり、鶴見川流域でも都市

化が急速に進行しました。この流域の著しい開発により、森林や水田、畑が減少し、それに伴って流域内の保水機能や遊水機能の働きが少なくなり、洪水流量が増大し、氾濫の危険性が高まりました。さらに雨が降ってから川の水が増えるまでの時間が短くなって、水防の準備や避難などに要する時間がほとんどなくなってしまうなど、危険な状態となりました。もともと水害を受けやすい地形条件を持つ鶴見川は、この都市化によって、水害の危険性が一層増大しました。

都市化により自然の保水機能が低下。水害は一段と大きくなりました。



【都市化と流出量の変化】



流域内に森林や田畑が多いと、降った雨の一部は地下に浸透したり、水田などに貯留されるため、すぐには川に流れず、徐々に川に流れ出てきます。しかし、都市化が進むと、地下に浸透できなくなったり、水田に貯留される量が少なくなるため、降った雨のほとんどが一気に川に流れることとなります。



●開発が進む前  
 雨水の大半は地中に浸透したり、水田やため池に貯留され、下流への流出は抑えられます。



●開発が進んだ後  
 地表がコンクリートやアスファルトで覆われたり、森林や水田などの地がなくなることで、下流への流出が増大し、低地部での氾濫被害が増加します。

生産性の低かった横浜の農業

全国平均と大倉根村の石盛の比較(港北区史より)

	上田	中田	下田
全国平均	15	13	11
大倉根村	11	9	6

石盛とは、水田1反あたりで収穫できる米の石高(11は1石1斗)を表したものです。

横浜地域の村々の生産高は、他の地域に比べて低いものでした。その理由の一つは、幕府領と旗本領とが入り組んでいて、土地や生産手段の改良が簡単にはできなかったということです。横浜地域の村の多くは、いわ

ゆる谷田村で、そこにある川の水量は少なく、しかも田植えのころになると低水温でした。また、溜池をつくっても狭く浅いものしか作れないため水量は少なく、結局、天水にかなり頼らざるを得ず、干害を受けやすい状態にありました。もう一つの理由は、生産性の低い直播が行われていたことです。直播法は、苗を移植したのではなく、育たない所などで行われていた方法です。さらに、鶴見川流域の場合、支配が入り組み、しかも小知行であるところから、水害の危険性があったとしても、治水に対して投資する財政的な余裕がなく、地形から言っても簡単に水を防ぐ方法はありませんでした。

東海道

徳川氏は、政治的中枢である江戸と地方を結ぶ幹線道路として五街道を整備し、道中奉行を置いて管理させました。五街道のなかでは、東海道の整備が最も早く、慶長6年(一六〇一)、江戸から京までの交通の要地となる宿場を定め、伝馬朱印状や伝馬定書を与えました。これを「東海道伝馬の制」といいます。「伝馬」とは、物資の運搬や乗用に使われる馬と労役に従事する人足を各宿に常備し、宿から次の宿へと継ぎ送る制度のことです。幕府の発行する特別の許可証を携行する公用の旅行者以外への伝馬の提供が禁じられました。五街道のうち横浜地域には東海道が通過し、神奈川・保土ヶ谷・戸塚の3つの宿場が形成されました。最初、品川



●近世横浜交通図(図説横浜の歴史P161より)

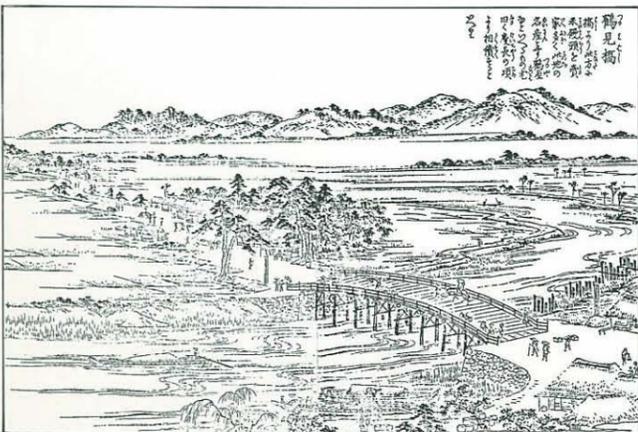


●現在の鶴見川橋

江戸時代の舟運

江戸時代になると、都市と農村との間の物資の交流が盛んになり、内陸部では牛馬背を主とする陸上運輸機関に比べて大量の物資を低廉な運賃で輸送することが可能な河川水運が全国的に発達しました。鶴見川の水運は、干満を利用して川を上り下りしており、川舟は、帆を張って風の力で動いていましたが、近代になると動力を使うものも出てきました。江戸時代以来、麦・新炭・肥料・塩などの輸送に重要な役割を

果たし、明治維新後も各種の輸送に利用され、昭和10年頃まで続いていたといえます。鶴見川の水運の古い事例には、港北区新羽の西方寺の本堂が、室町時代末期の明応(一四九二〜一五〇一)の頃、鎌倉の佐々目谷から、鶴見川を遡って運ばれて移建されたといわれています。近いものでは、嘉永6年(一八五三)12月、新吉田稲坂(港北区)の杉山明神の鳥居が、江戸深川から早淵川を遡って運ばれたという記録があります。



●昔の鶴見橋(江戸名所図会より)

# 川でも、街でも、住まいでも 雨水とコミュニケーション…総合治水

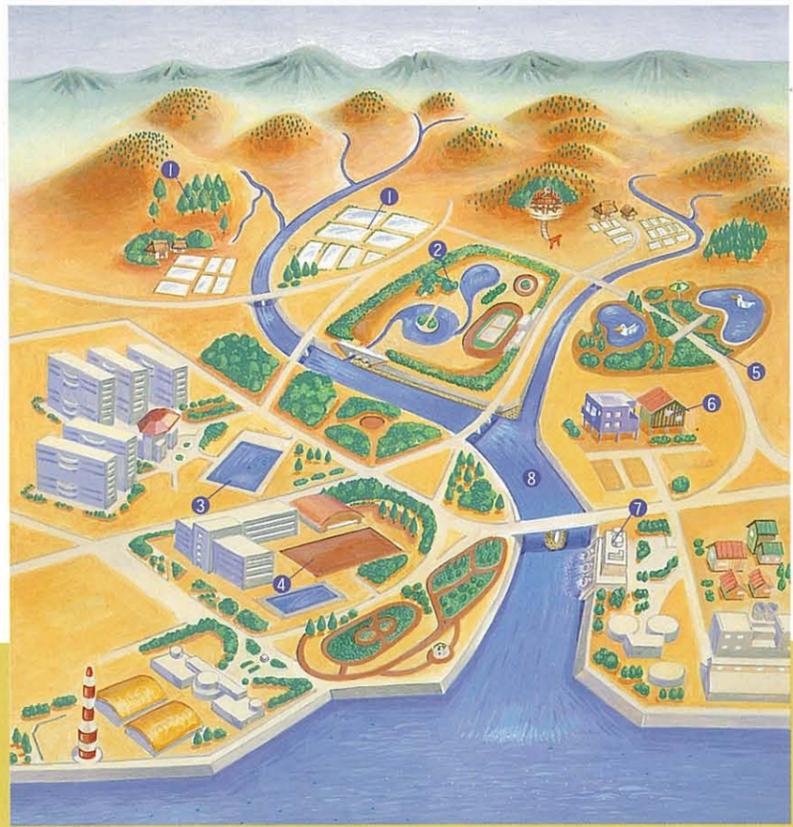
〈総合治水〉

普段は、静かに流れる鶴見川。でも、一旦、大雨が降ると暴れだし、水害をもたらします。もちろん、河川の整備には力を注いでいます。ところが、流域の開発があまりにも早いため、河川の整備が追いつけないのです。水害のない、安全な暮らしをす

るためには、河川の整備だけでなく、流域全体で雨水と仲良くつきあう街づくりを進めなければなりません。それが総合治水です。

- 流出抑制…雨水は溜めてから少しづつ流せば、川の水は急激には増えません。河川、下水道、公園、学校、住宅、駐車場などに、雨水を溜めた

- 暮らしの中の総合治水…雨の日は、水を流さない、住まいの敷地に降った雨を溜めて利用する、高床式の家にして被害を少なくする、こんな気配りも大事です。そして、普段から川との楽しいつきあひ、それが総合治水のスタートになります。

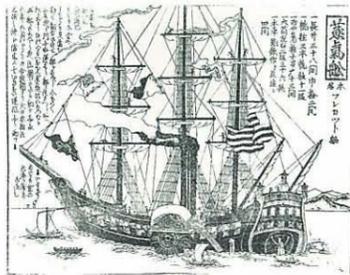


## 図説

- 1 自然のダム…森や田畑は、雨水を優しく受けとめます。
- 2 多目的遊水地…洪水のとき、川の水を溜めて下流の被害をくいとめる大規模な遊水地。ふだんはレクリエーション施設として利用出来ます。鶴見川と鳥山川にはさまれた区域を遊水地とする計画を進めています。
- 3 遊水池…住宅団地等の開発の際には、雨水を溜める施設をつくり遊水機能を保全しています。普段はみんなが利用できる遊水池が増えています。
- 4 学校…学校のグラウンドなどに雨水を溜める施設をつくり、屋上の水を地下に浸透させたりしています。
- 5 公園…公園でも池などに水を溜めるなどの工夫をしています。
- 6 ピロティ建築…堤防の高さより低いところでは、高床式建築にするなど、被害を最小にするための工夫が必要です。
- 7 ポンプ場…低地地域の雨水を川へ排水するためのポンプ場を整備しています。
- 8 河川整備…河川では、河道を広げたり浚渫をして、洪水を流下させる能力を高める努力をしています。



●生麦事件現場 (横浜開港資料館蔵)



●黒船図 (横浜開港資料館蔵)

## 横浜の開港

嘉永6年(1853)、米国東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航し、翌年再び来航して開港を要求しました。そして、嘉永7年(1854)、日米和親条約(神奈川条約)を結び、安政6年(1859)に横浜

を開港しました。開港後横浜には多くの外国人が居留するようになりましたが、その一方で外国人に対する殺傷事件も頻繁におこり、文久2年(1862)には、薩摩藩士が生麦村において、島津久光の行列を犯したことを理由にイギリス人を斬った、いわゆる生麦事件が起きました。当時、神奈川宿に住んでいた老人は、事件の発生にあわてる宿場の様子を後に次のように語っています。



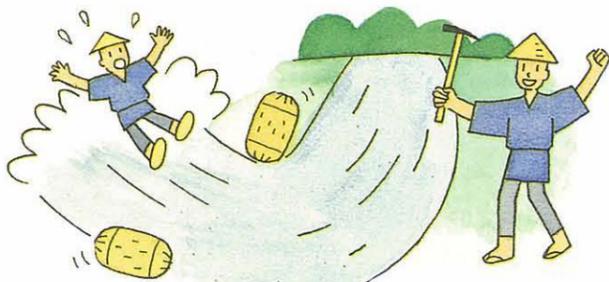
●ペリー (横浜開港資料館蔵)

「あのときは薩州様がこの宿に御泊まりとの事で、手前どもで朝からその用意を致して居りました。すると、昼少し過ぎに、血だらけの夷人が馬に乗って駆けて参ります。ほとんど薩州様が夷人を斬り付けたと伝えられました。薩州様はこの宿を大急ぎで御通りになりましたが、その後をイギリスの兵隊が鉄砲を担いで繰出して参つたりで、宿中はソラ、イギリスと薩州様と戦だと申して大騒ぎになりました。家々では戸を開けて、御題目を唱える者もおりました。まるで生きた心持ちは致しませんでした。」(「横浜貿易新報」開港側面史)

開港に反対する人々はこの事件だけでなく、幕府要人に対しても襲撃を企てるなど、日本の治安は次第に悪化していきました。このような中で、安政7年(1860)幕府は横浜周辺地域を特別取締り地域とし、外国人遊歩地(東は多摩川、西は酒匂川、北は八王子周辺までが境)内外の多摩川、鶴見川、相模川の船渡場、橋、東海道・矢倉沢付近・中原往還などの交通の要所や、海岸付近に見張番屋、木戸を設置しました。このとき鶴見川筋には鶴見橋・木尾橋・佐江戸橋などに見張木戸が設けられました。

## DOCUMENT CLOSE UP

### 【鶴見川の特性】——【水害と治水】



鶴見川の水害

西暦	年号	被害等
1765	明和2	(8月) 津波にて潮田の堤決壊
1782	天明2	(8月) 大風雨高波にて潮田堤残らず決壊
1791	寛政3	(9月) 大風雨、津波にて潮田堤決壊
1816	文化13	(閏8月) 潮田堤260間決壊
1817	文化14	(7月) 大風雨、津波で堤防破壊、作毛苗無
1823	文政6	(6月) 鶴見川出水で堤防越水
1833	天保4	(8月) 大風水害
1835	天保6	(6月) 大雨、鶴見川の出水で浜新田通りの田畑冠水
1849	嘉永2	(5月) 鶴見川及び多摩川溢水
1856	安政3	(8月) 大風雨、家屋損壊多数
1906	明治39	(8月) とくに上流で大出水
1907	明治40	(8月) 多摩川の溢水した水の鶴見川に流入し鶴見川東が溢水
1908	明治41	(9月) 鶴見川125ヶ所で破堤
1910	明治43	(8月) 多摩川の氾濫水が室瀬、鶴見川堤防上1.2mを超える出水
1911	明治44	(7月) 横浜・橋本・都筑の死者・行方不明13名
1914	大正3	(8月) 多摩川の氾濫水が室瀬、下流の堤防耕地に浸水
1917	大正6	(9~10月) 鶴見川河口部の生麦・潮田で洪水と高潮によって3300戸浸水
1935	昭和10	(9月) 早瀬川の堤防が数カ所にわたって決壊
1938	昭和13	(6~7月) 床上浸水約4000戸、床下浸水約7800戸 (8~9月) 至るところで越水・決壊
1941	昭和16	(7月) 床上浸水2144戸、床下浸水4593戸
1944	昭和19	(10月) 氾濫と崖崩れ
1948	昭和23	(9月) アイオン台風、国道鶴見橋上下流10m以上が決壊
1949	昭和24	(8~9月) キティ台風、下末吉・生麦・潮田・下野谷町などで2000戸以上浸水
1958	昭和33	(9月) 狩野川台風、床上浸水16991戸、床下浸水48766戸、鉄道・道路など不通
1966	昭和41	(6月) 各所で堤防決壊・漏水、床上浸水5495戸、床下浸水11664戸
1975	昭和50	(6月) 各地で河川が氾濫、特に台付町・青葉台地区の被害大
1976	昭和51	(9月) 大熊川堤防決壊、早瀬川沿いの各所で溢水。氾濫、下流で堤防越水5カ所
1979	昭和54	(10月) 潮田町・鶴見中央・生麦を中心に床上・床下浸水448世帯、被災者1184人
1982	昭和57	(9月) 鶴見川の無堤防部分からの溢水により、床上浸水130戸、床下浸水375戸

注) 床上・床下浸水は、特に場所の指定のないものについては、鶴見川流域における数である。

## 自然と共に生きる 厳しい一面、水争い。

堤防の高さが左右岸で違っていたらば、洪水は堤防の低い方に氾濫しやすく、当然堤防の高い側が被害を免れることになるため、堤防を築く場合は対岸の堤防の高さに気を配って争いが起きました。また、洪水時に対岸に渡って堤防を決壊させたり、雨期になると夜こっそり対岸の

〈激しかった水争い〉

堤防に破れめを入れておくなど、対岸の堤防を決壊させることにより、他の村の田畑に洪水を押しやり、自分の村には洪水が及ばないようにしました。このような水争いをとりまく争いを水争いといいます。

また、渇水時に下流に水が流れてこないことを心配して、上流の堰や水門の築造に係わる争いや、田植え時や草取り時期の水不足による用水盗みなど、水利の優先権や配分についての紛争なども水争いといえます。

〈寛政4年の紛争〉

寛政4年(1792)閏2月には大曾根・樽・師岡・駒岡などの村々が堤防の上置きを大規模に始めたのに対し、対岸の南・北綱島村は工事中止を求めましたが聞き入れられなかったため、村民を取り出して現場に向かいました。ところが大曾根・樽などの6か村側は村役人をはじめ大勢が掛け声をあげて打ちかちてきたため、乱闘になり、南北綱島側に死者2人、負傷者3人という被害を出してしまいました。そこで綱島村は、6か村側に掛け合いに及ぼうとしたが、彼らは一切聞き入れないばかりでなく、竹槍を持って警備しながら工事を進めるありさまでした。なお、この紛争は、寛政5年に和解しています。

〈アミガサ事件〉

## 鶴見川流域に残る江戸時代の家



●港北区勝田町の関家住宅●

江戸時代初期に建てられた農家の家屋で、この民家の形式は東日本全体でも古式のもの。国指定の重要文化財です。



●鶴見区獅子ヶ谷町の旧横溝家住宅●

幕末から明治中期にかけての農家の屋敷構えをほぼ完全形で残した民家です。市指定の文化財です。



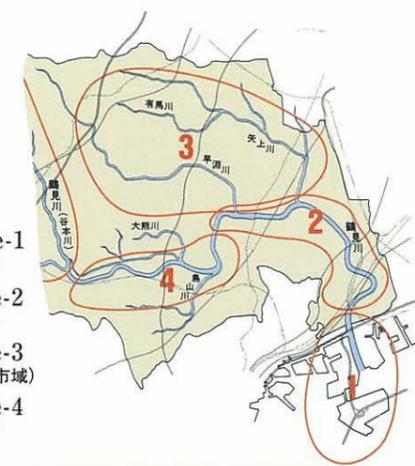
- ①Route-1 (河口域)
- ②Route-2 (下流域)
- ③Route-3 (支川都市域)
- ④Route-4 (中流域)
- ⑤Route-5 (上流域)

◎鶴見川をたずねて  
 <水系で川を理解する>

# Route 2



- ①Route-1 (河口域)
- ②Route-2 (下流域)
- ③Route-3 (支川都市域)
- ④Route-4 (中流域)

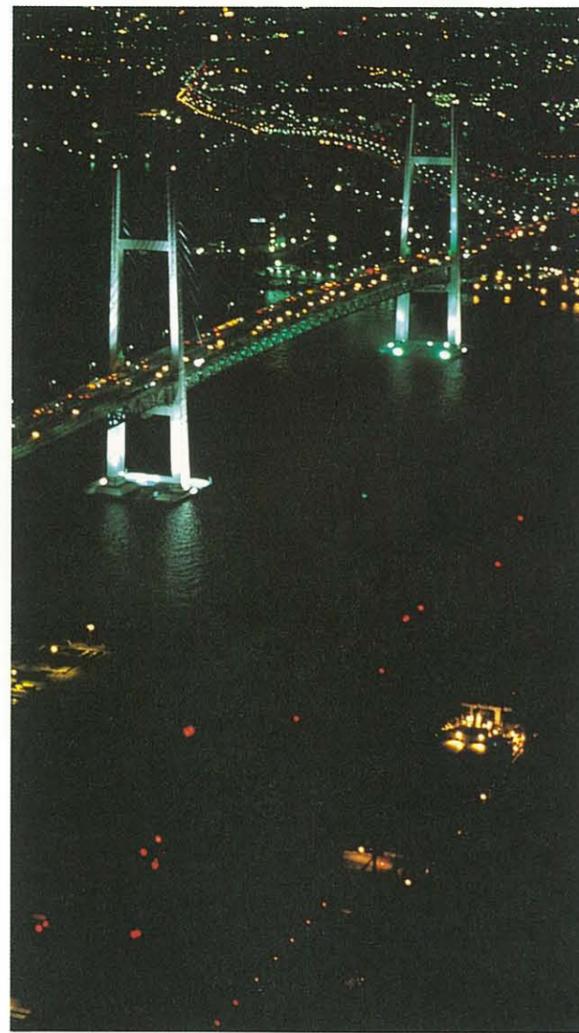


◎鶴見川をたずねて  
 <水系で川を理解する>

# Route 1

【河口域】

鶴見川の河口は古くから漁業が盛んで、漁や舟運によって人々の生活を支えてきた場所でした。現在は、埋立が進み、鶴見川の河口は京浜工業地帯となつて、両岸にまで工場が迫っています。この付近にも最近では新名所ができ人で賑わうようにな



■横浜ベイブリッジの夜景

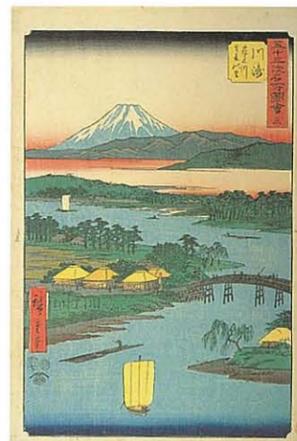
つてきました。横浜市鶴見区生麦にあるビール工場は、ビール作りの見学コースやレストランやパブなどもあり、家族で楽しめる好評です。また、全国的に有名な横浜ベイブリッジは、鶴見川の河口の先に位置します。このような新しいもの以外

に、古き良き時代をしのばせるのが、JR鶴見線国道駅から旧東海道を西に向かったところにある「生麦魚河岸通り」。80店余りの魚類を扱う店が立ち並びこの通りは今も毎朝威勢のいい声が飛び交い、活気に満ちた商いが行われています。

■鶴見川の河口



■ビール工場



■初代 歌川広重作 鶴見川生麦の里



■生麦魚河岸通りの標識



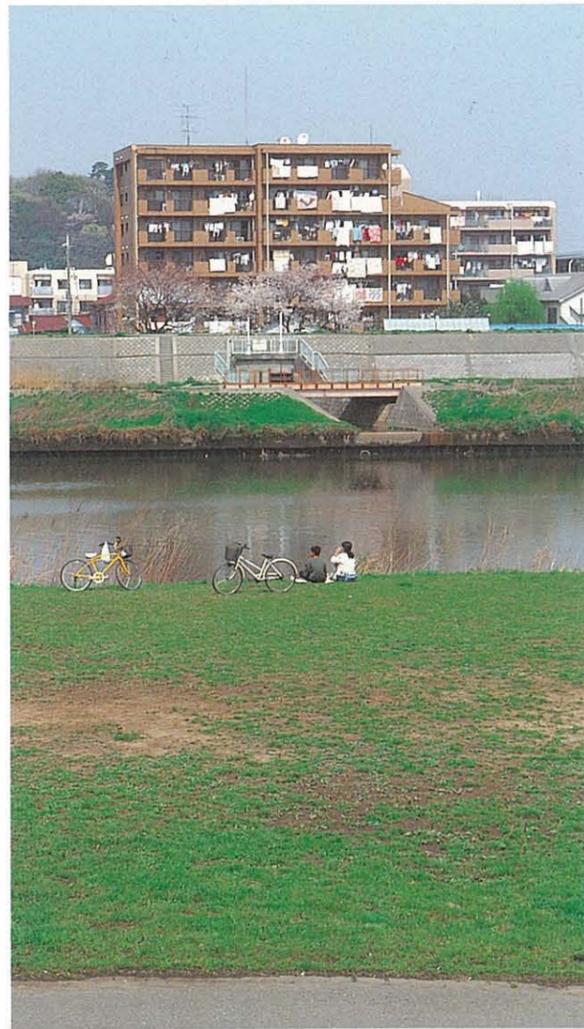
■生麦魚河岸通りのようす

【下流域】

鶴見川の下流域は広い川幅を持ち、水深も深く、流れが緩やかで感潮域(海水が入りする区間)となっています。矢上川との合流点より上流には広い高水敷もあり、河川公園や自動車教習所などに利用され、花火大会やマラソンなど、イベン

トの開催地としても盛んに利用されています。堤防はコンクリートで守られ、住宅や工場が川のすぐそばまで迫っており、まさに都市の中の川そのものの様相を示しています。それでも、河川空間は広々としていて、とても開放的です。堤防

の道端や高水敷には草花が咲き、私たちの目を十分に楽しませてくれます。住宅や工場の密集地にあつてポツカリ開かれた鶴見川、その魅力は決して失われるものではありません。



■梅町河川敷広場(大綱橋下流)



■ふれあって鶴見川'91の会場となった梅町の河川敷



■潮鶴橋付近



■ウミネコ



■森永工場の付近を流れる鶴見川



■鶴見川と早瀬川の合流付近



■鶴見川(左)と矢上川(正面)の合流付近



■鶴見川下流の戸穂橋付近



■鴨居付近で行われている農業



■キアシシギ

■小机堰



■鴨池人道橋



■亀甲橋の向こうに見える新横浜



■コサギ



■亀甲橋



■鴨池人道橋下流



- ① Route-1 (河口域)
- ② Route-2 (下流域)
- ③ Route-3 (支川都市域)
- ④ Route-4 (中流域)
- ⑤ Route-5 (上流域)

### ◎鶴見川をたずねて 〈水系で川を理解する〉

# Route 4

## 「中流域」

中流域の川幅は広く高水敷もあって開放的です。川沿いの低地には、まとまりのある農地も残されており、鴨居駅そばの農地では生協組織との契約栽培が行われるなど、新しい都市農業のあり方が模索されています。現在、鶴見川と鳥山川に囲ま

区域に大規模な遊水地が計画され、やがて広大なスポーツ・レクリエーション空間が創出されることになっています。この鶴見川と鳥山川の合流点のすぐ南側には東海道新幹線の新横浜駅があり、オフィスビルやホテルが建ち並び、街の様子が一変しています。

こうしたオフィス街に接する鳥山川の空間は、ビジネスマンたちの昼の憩いの場ともなっています。それとは対照的に、小机付近の低地一帯は鶴見川流域の中でもカルガモ、バン、カワセミなどの多くの野鳥を見ることのできる場所でもあります。



■早淵川で魚獲りをする子ども



■港北ニュータウンの中にある大塚成勝土遺跡の上からの風景



■矢上川にある水位標



■新吉田町に残っている谷戸



■恩田川中流部高瀬橋付近



- ① Route-1 (河口域)
- ② Route-2 (下流域)
- ③ Route-3 (支川都市域)
- ④ Route-4 (中流域)
- ⑤ Route-5 (上流域)
- ⑥ Route-6 (本・支川源流域)

### ◎鶴見川をたずねて 〈水系で川を理解する〉

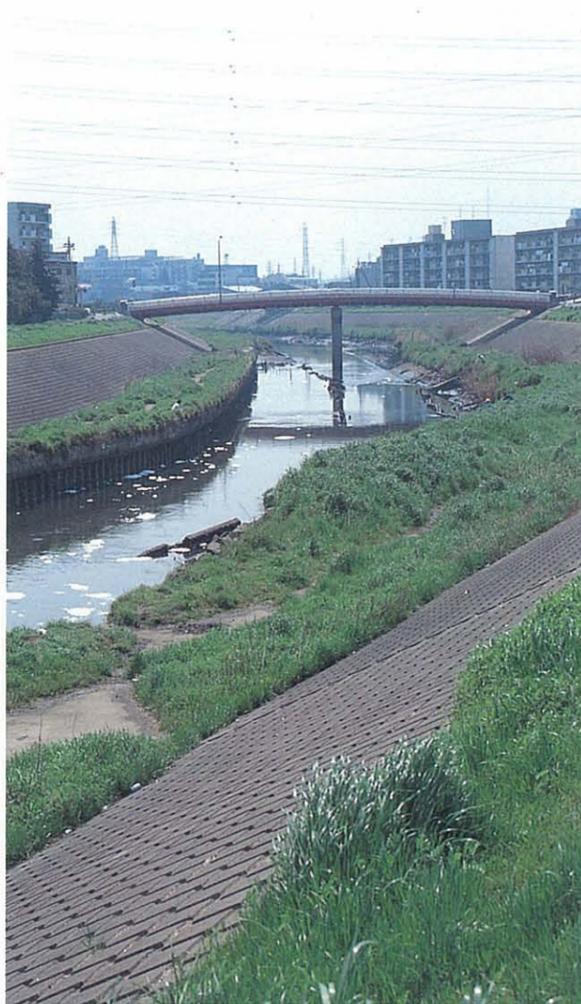
# Route 3

## 「支川都市域」

鶴見川で最も大きな支川恩田川の上中流域や矢上川流域は、ほとんどが宅地として開発され、これらの家庭からの生活排水によって川の水は白く濁り、ところによっては、泡立っているようなところもみられます。

す。港北ニュータウンの真中を貫いて流れる早淵川、その流域では大規模な開発が進められています。計画人口30万人の新しいこの街には、自然を生かした公園が配置され、これらをつぶせせらぎの道などが整

備されつつあります。早淵川は、こうした新しい街を流れる都市河川に変貌したわけですが、川沿いの低地では農業が続けられており、まだまだ自然の楽しみを味わせてくれます。



■矢上川一本橋付近



■早淵川上流の矢崎橋付近

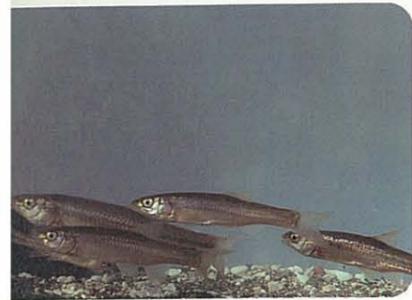
■港北ニュータウン航空写真



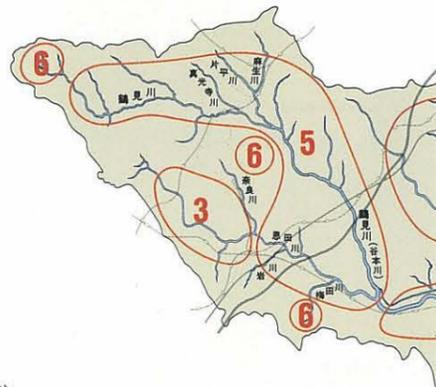
■早淵川中流の勝田橋周辺



■矢上川と江川の合流付近



- ③ Route-3 (支川都市域)
- ⑤ Route-5 (上流域)
- ⑥ Route-6 (本・支川源流域)



■新治の谷戸



■寺家ふるさと村



■新治の谷戸



■梅田川で遊ぶ子どもたち



■新治の谷戸



■源流の泉付近のようす



■小山田緑地付近の鶴見川



■小山田緑地



■寺家ふるさと村

### ◎鶴見川をたずねて

<水系で川を理解する>

# Route 6

## 「源流域」

鶴見川本支流の源流域は、台地や丘陵地に小さな谷が複雑に刻み込まれた谷戸とよばれる特有の地形をつくりだしました。鶴見川本川の源流は、多摩丘陵の一角の町田市上小山田町にあり、現在でも谷戸の風景が残っています。源流域一帯は雑木林に

囲まれ、この源流の森からしみ出した水は、清冽な流れを鶴見川に供給しています。谷戸では湧き水を利用した水田耕作が古くから行われ、丘陵部の雑木林は薪や炭として利用され、落ち葉も堆肥として使われてきました。ですから谷戸の環境は人々の上手な

利用と管理によってつくりだされた環境で、その田園風景は鶴見川流域のふるさとの原風景といえるでしょう。横浜市内でも梅田川や寺家川の源流域には、このような谷戸の風景がまだ残っており、様々な生き物たちのにぎわいを見せてくれます。



■恩田川と奈良川の合流付近



■ハナウド



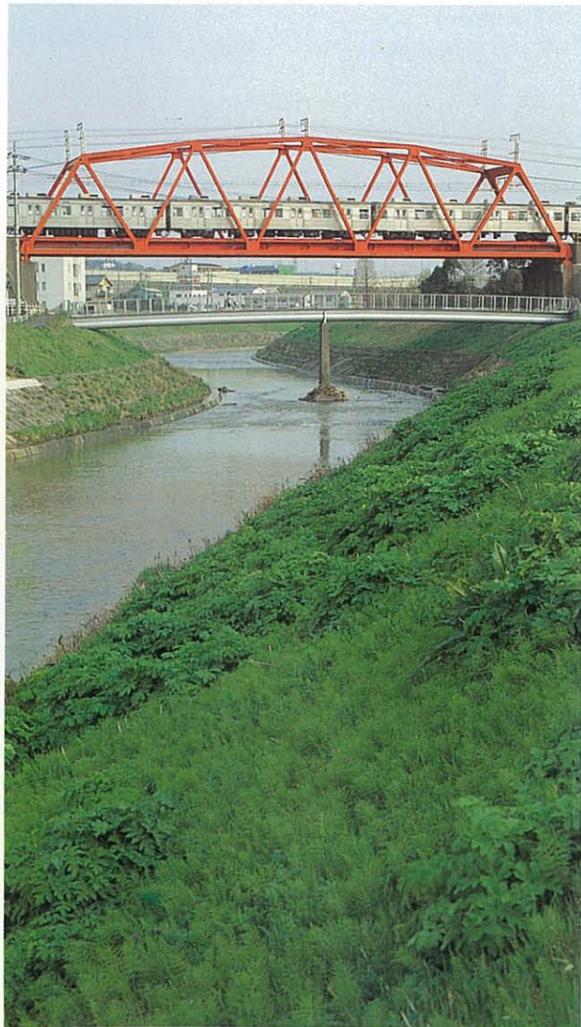
■袋橋から下流に向かって



■下川戸橋付近



■モンシロチョウ



■東急田園都市線の鉄橋付近(市ヶ尾)

### ◎鶴見川をたずねて

<水系で川を理解する>

# Route 5

## 「上流域」

上流域でも町田市上小山田町と下小山田町の境付近にある一級河川上流端の標識のある辺りでは、まだ比較的小さい水が流れています。川幅は狭く、両岸に樹木が迫ると自然のたずまいが残っていると

ころもあります。そこから少し下って、東名高速道路、国道246号、東急田園都市線などの幹線交通網が鶴見川本川、恩田川を横切る辺りになると、台地の上は住宅密集地となっています。川幅は中下流

域に比べてだいぶ狭くなっていますが、川沿いの低地には農地が連続し、梨の栽培などが行われており、川筋そのものは伸びやかな空間性を保っています。

■上流端の標示



### つるみ川に流る 民話

## 早苗地蔵



早苗地蔵 折本町の民話です。 (神奈川の民話より)

鶴見川流域に語り継がれてきた 素材で温かい 民話です。

この話には、緑区折本の村で語りつがれてきた悲しい話だ。むかし、そつ、天文の頃というからいまから四四〇年もまえのことになる。この、折本村に萬次郎という村役人があった。

でわたしの罪を許してくれまいよ。と、いって口をたたいた。萬次郎夫婦と信は、山におかしていった。木をきりたおし、山をきりくすしていった。村のしゅうは、これをみて、

なつとつがは、心をとりのあし山へむかつていった。その後を村人がついていった。いく月かが流れた。それは、天文八年(一五三九)の春だった。折本の里には、桜が咲きみだれてきた。この日、ついに用水は完成し、谷戸川の水が光つて南の村の田に流れていった。

### 鶴見川交遊録 EVENTS Shot

暮らしの中に、川と交流する楽しみの世界を再びつづけてみませんか。かつての鶴見川は、人と人が交流する社交場でした。夕方ともなると近所の人が集まり釣り糸をたらす。釣った魚は天ぷらや唐揚げとなって食卓を賑わす。祭には屋形船もくります。そんな、川と結びついた暮らしが、この鶴見川には確かにあったのです。ですが、いつの間にかそういう関係はなくなってしまいました。

様々なイベントです。イベントによって、すぐに鶴見川がよみがえるわけではありません。けれども、人と人とのつながりは確実に広がります。川を社交場とする人のつながりの向こうに、鶴見川の未来が開けるのではないのでしょうか。そして、川を媒介にした新しいコミュニティが形成されていくことでしょう。



●花火大会(港北区)



●ボートレース(鶴見区)

森永橋下流の漕艇場付近では、毎年イカダフェスティバルが開催されている。様々な工夫を凝らしたイカダが出場。鶴見川が最も輝く日だ。



●イカダフェスティバル(鶴見区)



蛇も蚊も祭り 鶴見川流域の伝統行事は、現在でもいさぎよしく行われている。荒つぽく、勇壮な蛇も蚊も祭りは、新住民の熱気も加わり、毎年見逃せない。



上●駅伝大会(港北区) 中●扇上げ大会(港北区) 下●蛇も蚊もまつり(鶴見区)



●カヌーレース(鶴見区)



### 今も残る マユの倉庫



●長津田に今も残る昭和4年に建てられた 乾蔵倉庫

長津田駅近くの茶褐色の大きな古びた建物は、大正時代からつい最近の昭和40年頃まで、緑区などで作られていたマユを集め、乾燥して保存していた乾蔵(かんけん)倉庫です。この建物と回りの平屋建てを合わせた施設がかつての都筑郡乾蔵所です。大正13年(1924)に株式会社長津田乾蔵取引所として誕生し、昭和4年(1929)になって都筑郡乾蔵販売利用組合に改められました。ここには今も「神奈川県乾蔵



明治の後半から大正にかけて、川崎市域に湾岸埋立てによって大工場が進出してきたため、横浜市においても工場誘致が図られました。大正元年(1890)には神奈川方面に7工場が集まっただけでした。その後第一次世界大戦を挟んで、浅野総一郎を始めとした実業家達によって、京浜臨海地帯(子安町地先)の埋立てが進められました。そしてそこに新しい工場が建ち始め、これがいわゆる京浜工業地帯の礎となったのです。

### 明治時代の 横浜の産業 埋立て

開港以来横浜が大量の商品が輸出されるようになり、そして輸出の中心が生糸であったため、鶴見川流域でも次第に生糸が生産されるようになり、米・麦中心の農業に加えて、丘陵地の畑に生糸や蚕紙紙輸出のための養蚕業が発達していきました。

### 鶴見川流域の歴史 HISTORY

一方明治中期からは特に上末吉・寺尾や近傍の片倉・神木寺などで「ジン・カブタ」マネギキャベツなどの栽培が盛んになり、子安・生妻など東海道沿いの畑ではセロリ・カリフラワー・レタスなどの西洋野菜の栽培が盛んとなりました。また、横浜の丘陵地では果樹栽培も盛んになり、サンモイイチジク・シワなどが出荷されるようになり、次第に都市近郊農村へと変化していきました。

### つるみ川に流る 民話

鶴見区の獅子ヶ谷と駒岡の中間に二ツ池がある。この付近は鶴見川に面しているが、余り川の恩恵に浴しておらず、かんがい用水は溜池に頼らざるをえなかった。二ツ池も、この溜池の一つである。現在は、池の真ん中に堤があり、二つに分かれているが、昔は、大池といつて一つの池であった。

大池には、一匹の竜が住んでいたという。この竜は、池の底で静かに寝ているのが好きであったから、池のそばを通る者が、いたずらに池に石を投げたりすると、機嫌を悪くして、池の底から立ち上がり、石を投げた人を殺したという。そこで、池のそばを通る時は、石を落とさないように、静かに通つたものだといふ。

この竜の暴れるのを鎮めるために、毎年、村人は娘をいけにえとして捧げていた。今年も、弥助の娘の番といふことになったが、娘には「おまは」といふ名前がつけられた。おまは、愛する恋人を竜のいけにえにするわけにはいかない。憎い竜を退治しようと思ひ立つた。熊使であったおまは、十頭の熊を連れて大池に出かけた。池に着いたおまは、池の中に石を投げ込んだ。怒つたのは池の中の竜である。気持ちよく寝ていると

## 二ツ池の竜

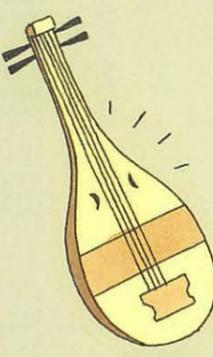
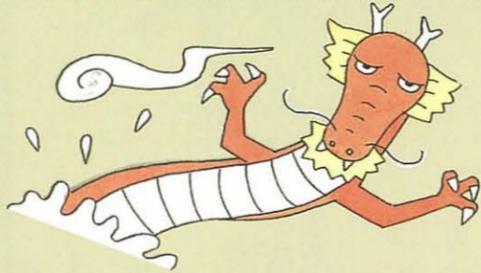
ころを邪魔されたので、何事かと、池の上に顔を出して見ると、一人の男と十頭の熊が戦いを挑んでいて見えない。すぐに、すさまじい死闘が繰り広げられた。竜は雨と風を呼び、熊に襲いかかり、また、熊も竜にかみ付いていった。

やがて風が静まった時、おまはが見たのは、竜の体にかみ付いて死んでいる十頭の熊の姿であった。竜は最後の力を振り絞って、天に昇ろうとしたが、力尽きて池に倒れ込み、それが堤となって二ツ池ができたといふ。



市民センター前、No.51

\*二ツ池の竜 鶴見区獅子ヶ谷町・駒岡町にまたがる二ツ池が、この民話の発祥地です。



萩坂昇著／神奈川県民話と伝説(下巻) (有峰書店)より

## 琵琶橋の伝説

横浜市港北区岸根町に琵琶橋という小さな橋がある。「武蔵風土記」には、丸木一本をもつて渡したる橋とあるが、ここには、いつかの伝説がこぼれている。

むかし、盲人がこまごまて橋のたもとに困つて背負つていた琵琶を橋にして渡ろうとしたが、誤つて落ちてなくなつたといふ。

また、江戸へ向かつてきた盲人がここで盗賊に襲われて殺された。盗賊は、盲人の琵琶をここに捨てたのでその名がこぼつたといふ。

これらのほかに、親子連れの盲人が、ここで一休みして、琵琶を弾いていたので、以来「琵琶橋」と名づけられたといふ。

### 鶴見川交遊録

## EVENTS Shot

きれいな川づくり、ぼくらが主役。「川と緑を考える子ども会議」は1985年から毎年1回開かれていた。企画から運営まですべて子どもによる。文字通りの子ども会議。緑区から港北区の約90カ所もの湧き水調査の発表や、牛乳パック舟遊びなど、子どもたちの観察力と行動力が生かされた発表が毎回注目されている。



●子ども会議



●探検ワーキング(緑区)



●川辺のコンサート(緑区)



緑区・イカダで遊ぶよ  
川は遊びの宝庫。手づくりイカダ遊びは、緑区を流れる鶴見川で開催。子どもたちの歓声が響きわたる。



●いかだで遊ぶよ(緑区)



## 変貌する 鶴見川流域

第2次世界大戦の戦災によって減少した横浜市人口は、戦後増加に転じた。周辺農村部では、昭和30年代後半からの高度経済成長期に、東京・川崎方面からの急激な人口流入及び工場の建設によって農地が住宅・工業用地に転用され、農地が激減した。そして、港北ニュータウンという港北区と緑区にまたがる大規模な開発が計画されている。この港北ニュータウンは、計画人口30万人(地区内)の「自然を大切に」する新しいまちとして計画進行中で、平成2年4月現在の居住人口は約3万人となっている。

また、工場の進出は鶴見川河口部だけでなく、流域内陸部でも多く建設されてきた。古くは鶴見区の森永製菓鶴見工場

(大正14年)などがあり、その他主なものは、緑区佐江戸の日本電気横浜事業所、松下通信工業佐江戸工場などがある。最近では、緑区白山の白山ハイテクパークや三保町の日本通信衛星などのハイテク産業も進出してきている。

このような、工場の進出、人口流入、宅地造成と共に、交通網も近年急速に発達してきた。JR私鉄といった鉄道網の他、道路網では東名高速道路、第三京浜道路、国道1号、15号、246号など重要な道路が数多く流域内を走っている。また最近では、市ヶ尾の谷本川農業地帯に東名高速道路の緑インターチェンジが建設される計画が示され、緑区南部に構想されている第2東名高速横浜環状道路などの関連で、住民と行政との間で話し合いが続けられている。



●新横浜駅周辺(市民グラフィックNo.78より)

## 鉄道網の発達

鶴見線はもとJR(元国鉄)が建設したのではなく、私鉄の鶴見臨港鉄道が大正15年3月10日に浜川崎・弁天橋と分岐点(武蔵白石)・大川間を開業したことから始まり、昭和5年10月27日までは貨物線であった。これは当時川崎駅から浅野セメント(現・第一セメント)へ貨物線が引かれており(現在の南武・浜川崎線)、ここから鶴見川河口の埋立地へ事業所の進出に際して必要になった。そして、工員輸送の必要性から旅客線化することになった。その後昭和5年10月28日には、弁天橋から鶴見駅(現在より少し国道寄り)まで開通し、昭和9年12月23日に現在の鶴見駅へ乗り入れ、昭和15年11月1日の新芝浦・海芝浦間開通で現在と同じ形となりました。鶴見線は、このような過程から産業振興上の意義が大きく、戦時中の工員輸送確保から国有化され、今ではJRの路線となっています。



●鶴見線

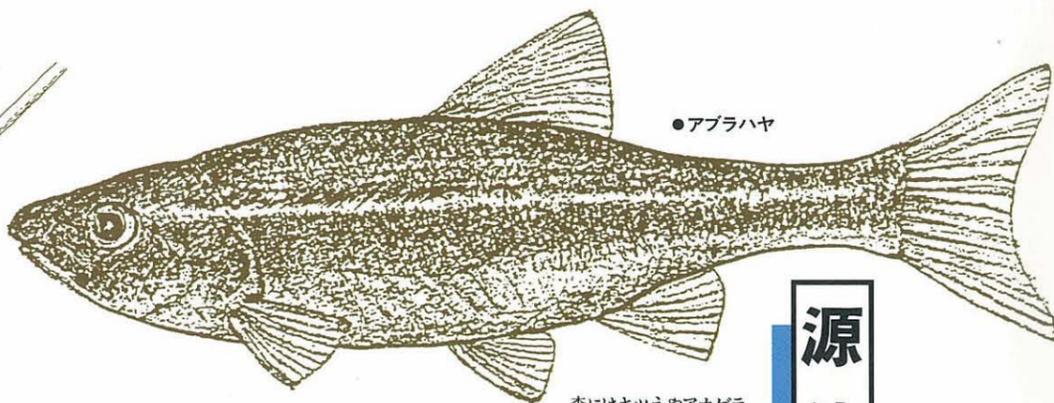
この路線の利用者はほとんどが工場の通勤者や沿線の通学者で、通勤・通学時にはダイヤが集中していますが、昼間は2時間に1本しかない時間帯もあります。終点海芝浦駅ホームからは京浜工業地帯のコンビナートが一望できます。ただし、一般乗客がホームに下りることは出来ず、改札口から外へは出られません。

## 鶴見川流域の歴史 HISTORY

め、北関東・甲州・信州・八王子方面の生糸を横浜運送す目的で、明治41年(1908)9月に東神奈川・八王子間に民営の横浜鉄道が開通し、その後大正6年(1917)に政府がこの線を買収して国鉄とした。京浜電気鉄道(現・京浜急行)も明治38年(川崎から神奈川に延長、同44年には神奈川町地先埋立地に横浜鉄道貨物線が開通し、横浜を中心に鉄道網が発達していきました。



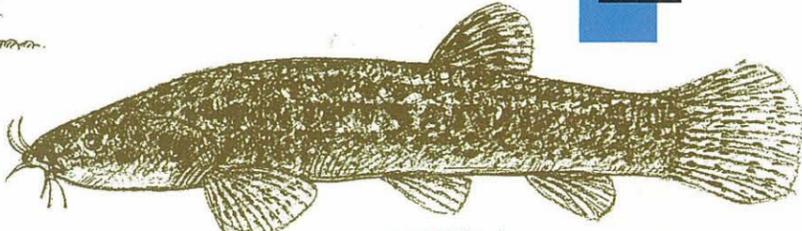
●カワセミ



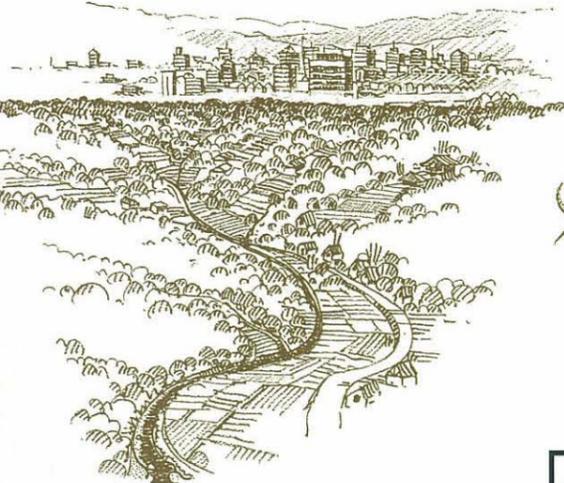
●アブラハヤ

# 源流

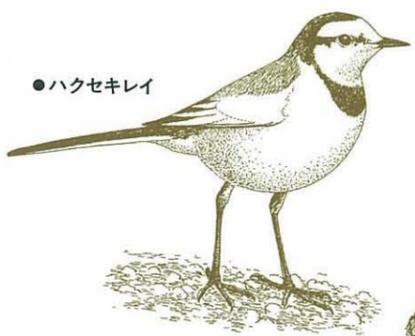
森にはキツネやアカゲラ、水源の泉が支える清流にはホトケドジョウやアブラハヤが暮らしています。源流の、森も泉も、そしてアブラハヤも生き延びろ。



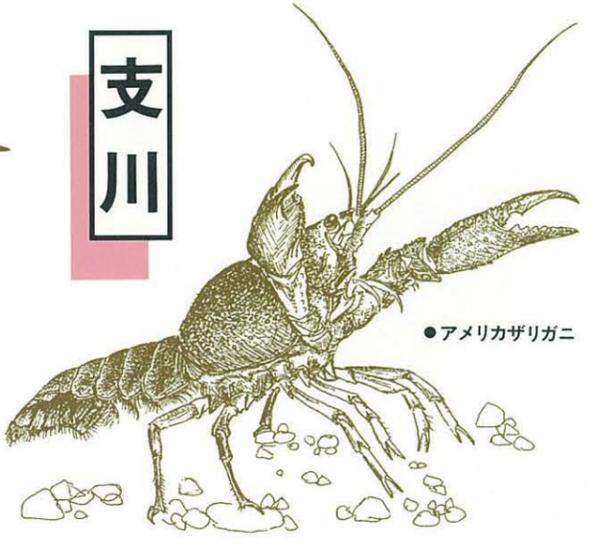
●ホトケドジョウ



# 支川



●ハクセキレイ

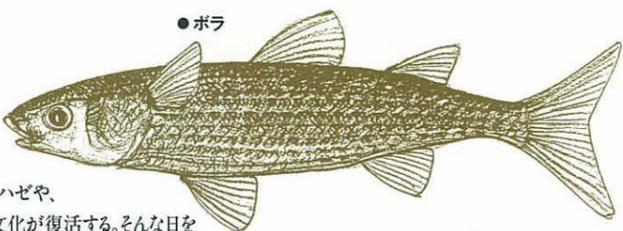


●アメリカザリガニ

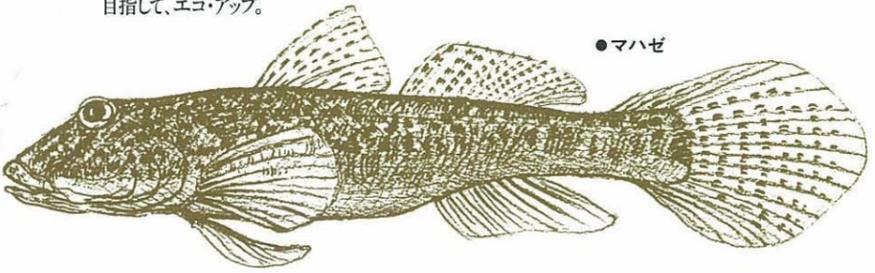
新しい町の中に、ザリガニの棲む小川が再生されました。ニュータウンにも、生き物の賑わいのある小川や池を配置したい。



ビルや工場が建ち並ぶ下流域に、ボラや、マハゼや、スズキが帰ってきます。川辺の秋にハゼ釣り文化が復活する。そんな日を目指して、エコ・アップ。



●ボラ

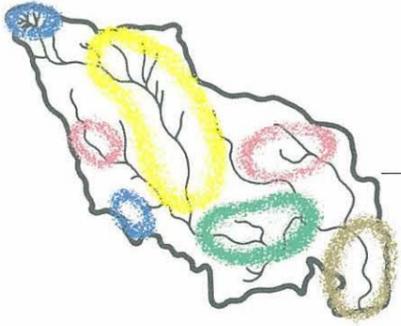


●マハゼ

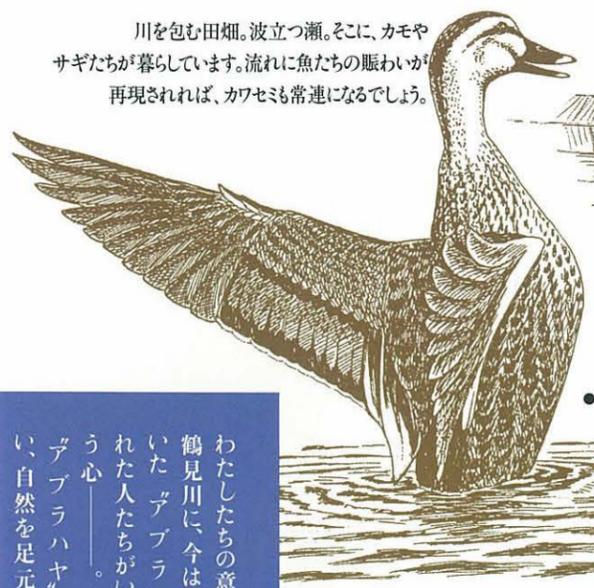
# 下流

イラスト：谷口高司／岸 洋三／浅野三保子

BELIEVE in NATURE つるみ川

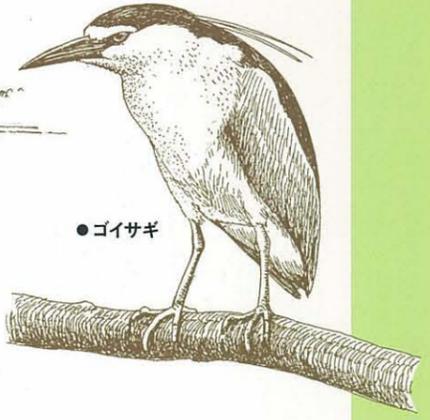


川を包む田畑。波立つ瀬。そこに、カモやサギたちが暮らしています。流れに魚たちの賑わいが再現されれば、カワセミも常連になるでしょう。



●カルガモ

# 上流



●ゴイサギ

# 生

まきものたちの  
にぎわい

# 水

系の  
やすらぎ

水辺に生きる、生き物たちの元気が、エコ・アップ(エコロジー)のあかして。

わたしたちの意識のなから薄れかかっていた鶴見川に、今はもう居なくなつたものと思つていた「アブラハヤ」を見つけ出し、救つてくれた人たちがいました。街を愛し、故郷を思う心——。一人一人のそんな気持ちが「アブラハヤ」をはじめ多くの生き物を救い、自然を足元から取り戻す力になっていくのではないのでしょうか。鶴見川は、今日もわたしたちの暮らしのそばで流れています。言葉を持たない川への思いやり、どうぞ忘れずにいてください。その思いやりが、もつと地球とつながつた街、そして自然を、これからの子どもたちに手渡すための事業につながっていくのですから。

# 中流

広い河川敷にはアシやオギの群落が広がり夏にはオオヨシキリの賑やかなさざずりが響きわたります。そんな豊かな草原が21世紀の流域にも必要です。



●セッカ



●オオヨシキリ

# 結

---

---

# 鶴見川

発行／1992年5月

編集・発行／横浜市下水道局河川計画課

〒231 横浜市中区港町1-1 TEL045(671)2858

写真・資料協力／建設省京浜工事事務所, 神奈川県立博物館, 神奈川県教育委員会

川崎市市民ミュージアム, 横浜市埋蔵文化財センター

横浜開港資料館, 横浜市鶴見・港北・緑各区役所, 横浜市都市計画局

町田の自然を考える市民の会, 鶴見川源流自然の会

緑区・自然を守る会, 鶴見川を楽しむ会

よこはま・かわを考える会, 鶴見川子ども発見団, アマノ・スタジオ, 230club, 昼間松之助, 吉沢義道

製作協力／㈱日本能率協会, ㈱水環境研究所

デザイン／JEL Co, Ltd., ㈱オクトパス

印刷／山陽印刷㈱

横浜市広報印刷物登録 第040014号 類別・分類B-KE183

---

---



